
外見ファクター ～エステへGo!～

おせろ道則

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

外見ファクター ～エステヘGo!～

【Nコード】

N9092D

【作者名】

おせる道則

【あらすじ】

綺麗になりたい。好きだった男の子に、綺麗な姿になってもう一度会いたい。大学の同級生に告白して、振られてしまった、紗枝。いつもなら、うじうじしてヤケ酒に走るのに、今回は違った。彼女は決意する（さて、何にでしょう？）

第一話 ソーセージは決意する（前書き）

この作品は「はじめての×××。」の企画作品です。

紗枝のような、どこにでもいる女の子はこんなにかんばれるんです。
最後まであたたかく見守っていただければ幸いです。

第一話 ソーセージは決意する

扉を開けば、缶空^{かんから}かんかん。

「……」

からんからんと転がって、ドアから外に出た空き缶を栄次^{えいじ}は黙って拾い上げた。

玄関先からそこはもう、ビール缶とチューハイ缶の、雑多な舞踏会場だった。

栄次はべつに驚きはしなかった。

メールで呼び出されたときから、嫌な予感^{よかん}はしていたのだ。しかし……鍵もかけていないなんて。

無用心すぎると、栄次は思った（もちろん、こんな寒い冬の日に、マンションの前で待ちぼうけをくらうよりかは、よかったが）。

まあ、この無用心さには、わけがある。

玄関口の空き缶が、その理由を説明している。

そう、彼女は失恋したのだ。

そして、ヤケ酒は「彼女」の得意技だ。外で飲んで、さらに部屋でも飲んだに違いない。

それも、一人で。

「女の一人ヤケ酒なんて、するもんじゃないぜ」

栄次は疲れたふう^{ふう}にため息をついて、靴を脱いだ。

もちろん、ここは栄次の部屋ではない。

そして、栄次の恋人の部屋でもない。

栄次の大学のクラスメート、紗枝^{さえ}の部屋だ。

栄次はコートとマフラーを脱いだ。台所を通り過ぎ、薄暗い廊下を進んだ。

通り過ぎる際、台所のコンロの上にも、飲み干したチューハイ缶があった。

それを横目に、奥の部屋につながるドアを、栄次は開いた。

昼間だというのに、部屋は夕方のように薄暗い。

栄次はじつとりとした空気に、少したじろぎ、汗をかいた。
この薄暗さ。

遮光カーテンが、ほとんど陽の光をシャットダウンしている。か
すかにこぼれる光で、栄次は部屋の中を見回すことができた。

すると、部屋の隅で、何かがうごめいた。

「うわっ」

栄次は思わず小さく声を上げた。

部屋の隅に、ふくらんで丸まった布団が。

栄次は黙ってゆっくりと布団に近づいた。

しかし、歩きたびに空き缶に足があたり、防犯仕かけのように、
ガラガラと音をたてた。

「……」

じれったくなつた栄次は、遠慮せずガラガラと空き缶を蹴飛ばし
ながら、そちらに向かった。

布団の前で腰をおろす。

栄次は困つたように、丸まった布団を見つめた。

それはドイツ名産のホワイトソーセージにも似ていた。

彼女の体は、頭からすっぽり布団にくるまれていた。

布団は、じつと、栄次の言葉を待っていた。

「……またフラれたんか？」

しょうがなく、栄次が尋ねた。

ソーセージは何も言わない。

栄次は黙って、しばらく彼女からの返事を待った。

布団の中から、泣きつかれた声がした。

「大崎君……『そんなんじゃないって』」

なんともいえない表情で、栄次はポリポリ頭をかいた。

「あたし……フラれたんだねえ」

彼女はいった。

「……」

フローはもう抜きにして、栄次はちよいつと、布団の口を持ち上げた。

パジャマ姿の紗枝が、うつむきで泣き伏していた。布団が持ち上げられたので、寝ているわけにもいかなかったのか。

紗枝はゆつくりと起き上がって、鼻をすすった。

一体どれだけ泣いたのだろう。

紗枝のまぶたは、かなり重たそうだった。

でも、泣き疲れていても、まだ泣きたらないようだった。

しゃくりあげるように肩を震わす彼女を、栄次は見つめた。

真正面から、紗枝の姿を、じっと見つめた。

長いまつげ。

かわいらしい丸顔。

肩が小さい。

栄次は黙って、なおも紗枝を見続けた。

うす茶色のねこっ毛。

前髪を横に流して、肩をくすぐるようなボブカットヘア。

その髪を少し乱して、涙をいつそう目に浮かべ下を向いていたが、紗枝は不意に顔を上げた。

じっと栄次を見つめ、紗枝は小さく口を開いた。

いよいよか。

栄次は思った。

そう、これは、二日酔いの彼女が、栄次に抱きついてくる予兆だ。

紗枝はいつも、誰かにフラれるたびに、酔いつぶれ、最後に男友達の栄次を呼びつけ、泣きながら抱きついてくるのだ。

それは、失恋からの復活の儀式のようなものだった。

栄次はそれを待っていた。しかし

「ダイエットしてやる！」

紗枝が、睨みつけるようにして、栄次にいった。

「は？」

栄次！ もうヤダ！ 死にたい！

という、いつもの泣き言は？

栄次はぼかんと紗枝を見た。

「あたし、痩せるわ。」

それで、もつときれいになって、大崎君よりいい男とめぐり合つて、

今度こそお付き合いするのよ」

布団を吹き飛ばし、紗枝はその場で立ち上がった。

「何よ、私だって女よ」

「いや、うん。そうだよ」

「だから絶対綺麗になるんだから」

だからの意味が分からない。

栄次は思ったが、それ以上に、紗枝の意気込みに驚いた。

「いつもと違うじゃん」

紗枝は栄次をキツと見つめた。

「もうね、こんな風にフラれるたびにヤケ酒して、スタイルも崩れていて……」

そんな自分が、つくづく嫌んなってきたの」

「ほうほう」

ヤケ酒のたびに慰め役に呼ばれる、俺の身の上に気づかいは無しかい。

栄次は心の中で愚痴をこぼした。

「それに……栄次にも悪かったよね。」

毎回呼び出されて迷惑だったよね、ごめん」

紗枝は急にしゅんとなって、謝った。

……テレパシーってあるのかな。

栄次は思った。

「いや、俺のことはいいんだけど」栄次はいった。

「確かに、それは前向きだよなあ」

栄次は驚きを入り混じらせて、彼女をほめたたえた。

「私は生まれ変わるのよ」

紗枝はいった。表情が生き生きしていた。

栄次は納得するように、うなずいた。

「じゃあ変わってみようか」

栄次はいい、ゆっくり腰を上げた。

そして紗枝の両肩に、手を置いた。

えっ？

紗枝は栄次の顔を見上げた。

すると栄次は、紗枝の両肩を下に押し、もう一度布団の上に座らせた。

ありや。

紗枝は、栄次を少しでも意識した自分を恥じた。

じつと紗枝の目を見て、栄次はいった。

「で。じゃあ、とりあえずどんなこととして、痩せようと思ってんの？」

「そうね」

紗枝はいった。

「まずはじゃあ、流行の***ダイエットでも！」

「おやめなし」

「何人よ」

「体に無理がかかって危険だって」

「そんなこと無いよ」

「そんなことあるんです」

栄次はいった。

「一品ダイエットとか、栄養学から見たらよくないに決まってるだろ。」

それにそんなダイエット、一生続けていけるのか？

やめたら、大体リバウンドするのがオチだよ」

紗枝はぐっと言葉をのみこんだ。栄次はいつも正しくて、どこか意地悪だ。

栄次はメガネをはずして、メガネ拭きで綺麗にふいた。

「痩せるにしても、健康的でないと、後々いいことないぜ」

「あう……」

反論できずに、紗枝は栄次を憎々しそうに見つめた。

「にらむなよ」

「にらんでません」

栄次はメガネをかけなおした。

「続きがあるんだから」

紗枝はきょとんとして、栄次を見た。

栄次は、部屋に散らかっている空き缶をひとつ、ひょいと手にとった。

それを紗枝と自分の間に、ちよんと置いた。

「何？」

いぶかしげに、紗枝が尋ねる。

「誓いの儀式」

「はあ？」

紗枝は笑おうかと思った。

しかし、栄次の表情は真剣だった。

紗枝は思わず、ちゃんと背を伸ばした。栄次の言葉の続きを待った。

「本気できれいになりたいんだな？」

栄次がいった。

「……うん」

「フラれて落ち込んで、ヤケ酒するような女には、もうなりたくないんだな？」

「うん」

「努力は惜しまないか？」

「惜しまないわ！」

「よし」

栄次は、紗枝の両肩をぽんぽんとたたいて、いった。

「俺の姉貴を紹介しよう」

第二話 夢の中でも彼女はときめく

体の重みを感じなり、まるでやわらかな水の中に浸っている感覚。紗枝はおもむろと、布団の中で寝返りをうつ。

枕に顔を押し付けて、紗枝は幸福なまどろみを感じていた。

そして彼女は夢を見る。

夢の中では、いくつもの思い出が混ざり合い、理路整然としない物語に変わっている。

あたしは……

紗枝は夢を見ながら、少し瞼を震わした。

あたしは、自分でいうのもなんだけど、とりたてて普通の女の子だと思う。

大学で、素敵な恋を始めたい。

彼氏と街を歩きたい。

楽しくてドキドキしたキャンパスライフを送りたい。

そんな思いで、あたしは実家を離れて、ここ京都の大学で、一人暮らしを始めたの。

田舎から京都に出てきたあたしは、それだけで、最初とってもわくわくした。

赤レンガづくりの小さなキャンパスは、あたしに幸せな学生生活を約束してくれる場所のようだった。

新しい生活。新しい友達。

興味ある授業。面白い先生。

高校とは違った、新しい世界。

あたしはもう、大学生活すべてがとってもキラキラして見えた。そしてあたしは、予告どおりに、恋をした。

初めて好きになったのは、テニスサークルの先輩だった。

高校でもテニス部だったから、そのままテニスをしようと思っ
て入った。

でもそこは、コンパサークルといったほうが正しくて、毎週末
サークルのみんなで呑みに いった。

その中で、副部長の先輩が、とつてもかっこよくて。

あたしは、飲み会で先輩と隣になるたび、ときどきしていた。

サークル仲間はみんな仲がいい。この勢いで、きっと付き合え
るんじゃないかと思った。

そして告白したけど……ダメだった。

先輩には、好きな人がいた。

あたしは泣いた。

フラれた後、あたしは誰もいないテニスサークルの更衣室で一
人泣いた。

その夜、大学生なんだからお酒で失恋を癒そうと、あたしは近
所のスーパーでお酒を買い 込んだ。

部屋で飲みつぶれ、酔った勢いで、同じクラスの栄次にメール
をした。

ああそうだ。栄次と仲良くなったのは、あれがきっかけだった
んだった。

お酒つてのはすごいね。

普段しように無いことを実現させてくれるんだから。

同じクラスメートといっても、栄次のついてあたしはあんまり
いい印象をもつてなかつ た。

いつも前の席に座って、先生の話をもじるときいて。

メガネが妙にインテリくさくて、あたしの肌には合わなかった。
地味でもないけど、イマドキでもない。

それが栄次。

大学に入ったすぐのとき、新入生歓迎コンパでたまたま隣になって、場のノリでメルアドを交換した、それだけの間柄だった。

突然のメールで、栄次はびつくりしたかもしれない。

でも、その一時間後に、奴は本当に、あたしのマンションに来た。

奴が玄関を開けたとき、ゆるゆるジーンズにトレーナーというお家ルックで出迎えたあたしを見て、栄次はふきだして笑った。

あたしは憤慨して、そのまま栄次を部屋に連れ込んだ。

そして、先輩にフラれたいきさつを、栄次にとうとうと語った。あたしは、こんなに辛い失恋は初めてだと栄次にぐちった。

あたしの部屋で、栄次はきちんと正座をしていた。うなずきながら、真剣に話を聞いてくれた。

いい奴だ……

初めて栄次をそう思った。インテリ君が、寡黙ないい人君に変わった瞬間。

でも、やっぱりこいつは嫌味な奴だと、後で訂正しなおすんだけどね。

それは置いておいて、あたしは……本当に失恋が辛かった。

高校のときより、失恋が辛くなった。

あまりの辛さと、先輩とのこれからの気まずさに、あたしは頭を悩ませた。

それで大学のサークルは辞めちゃった。

それからあたしは、ちょっと太って、少しだけ社交界に疎くな

った。

半年を過ぎて、それからあたしは、ゆつくりと失恋の傷を癒していった。

そして、今度はもつと好きな人に出会った。

大崎君。

あたしは彼を好きになった。

大崎君を好きになったのは、同じ授業で、ノートを見せ合うようになったから。

あたしたちは、同じ授業では、よく隣に座った。

お互い授業はまじめに受ける方だったけど、それとは関係のない事もあたしたちはたくさん話した。

彼はいつもおしゃれで、話題はとても、イマドキだった。

さわやか好青年な顔をしていて、笑うと、歯並びのいいきれいな白い歯がのぞいた。

先輩後輩問わず、大崎君の評判はとてもよかった。

「大崎君、かーわいー」って、先輩が二階の窓から、下校する大崎君に手を振るの。

大崎君は、はにかんで、手を振りかえしていた。

後輩は、年下という特権をフルに活用して、「大崎せんぱーい」って、無用にくつついてくる。

大崎君はテレながら、それに抵抗していなかった。

あたしは、そんなことはできなかった。

大崎君を好きになっても、そんなオープンに、彼にアタックするなんてできなかった。

大崎君を間近で見たいだけで、あたしは満足だった。

ノートを写しているとき、あたしの前には、大崎君がいる。
あたしは、ノートを写しているふりをして、大崎君を見つめる。

綺麗な黒髪。

お洒落なヘアカット。

短髪がとてもよく似合う。

ああ、好青年だ……（大崎君ラブ）

夏場では、半袖Ｔシャツで大崎君は、またかっこいい。

程よく筋肉のついた、締まった身体。

居酒屋のバイトをしているって言っていた。何をしても大崎君は素敵だと思った。

あたしは、高校でも何人かと付き合ったけど、こんなにドキドキしたことはなかった。

確かに、先輩にも相当ドキドキしたけど、大崎君を好きになつていくごとに、先輩の失恋の痛みはいつの間にか消えていった。

そしてますます、大崎君への思いは募って……

大崎君には、現在彼女がいないのを友達から確認して、あたしは放課後に、彼を体育館の裏に呼んだ。

がんばりました。もう一度の勇気でした。

そして……またもや玉砕したのでした。

*

「なんて……いやな夢だ」

紗枝は枕に顔をうずめて、獣のように、うなりをあげた。

朝日がまぶしい。

《ジリジリジリ》

目覚まし時計がなっている。午前7時ジャスト。

「何でこんな時間になるのよ」

土曜日の朝早くに、何があるっていうの。

紗枝は苛立ちを覚えながらスイッチを押した。

「まったく……」

寝なおしてから、十五分。

紗枝はガバリと起きた。

「そうだ！ 栄次に呼ばれていたんだったよ！」

紗枝は急いで、洗面所にとびこんだ。

第三話 決めたからには踏み出そう

JR京都駅の中央入口前。

その両側には、右は京都劇場、左は高島屋につながる長いエスカレーターがある。

その真下から外をみれば、冬の澄んだ青空の下、京都タワーがそびえたっている。

紗枝は寒さで震えながら、栄次が来るのを待っていた。

しかし、京都タワーの塔頂を見つめるのも、もって五分。紗枝の耐寒数値は限界に近づいていた。

約束時間が過ぎたのに、栄次が現われない。

「さ〜む〜い〜」

紗枝はダッフルコートの首元をぎゅっと締めた。

一月の終わりは、冬でも一番寒い時期だ。

この寒さは骨に沁みる。これこそ盆地地帯の風物詩。極寒の京都の土曜の朝だ。

「おそい！　なんで来ないのよ」紗枝は非難めいてあたりを見渡した。

すると、右手の京都劇場の方から声がした。

「ごめん、遅れた」

バイクを押しながら栄次が近づいてきた。

「栄次」

紗枝は怒りと同時に、驚いた。

紗枝は栄次がバイクに乗る事を、この日初めて知った。

「ちょっと待っててな。これ、駐車してくるから」

そういうと栄次はバイクを押して、駐車場の中に消えていった。

へー。栄次、バイクに乗るんだ。紗枝は思った。

イタリアの映画に出てきそうな、脚こぎバイク。

今日の栄次は、黒の皮パンツに、茶色の皮ジャケット。

バイカーサングラス。それに似合うヘルメット。

「ふうん」

紗枝は感心したふうにならずいた。大学とはずいぶん服装が違くない。

なあんだ、本ばかり読んで、嫌味な「もやしっ子」じゃあなかつたのね。

「お待たせ」

栄次がようやく紗枝のところに来てきた。

「寒かった」

紗枝はぶうたれていった。

「ごめんって」

栄次は笑って、缶コーヒーを紗枝に渡した。

「わ、買ってきてくれてたんだ。ありがとう」

「ま、飲みながら行くか」栄次はいつて、歩き出した。

「ねえ。それより、どこにいくの？」

紗枝はきいた。

「ダイエットの聖地へ」

「はあ？」

「いいからついてこいよ。俺の紹介だから、安心しなさい」

栄次はそれだけいうと、すたすたと先へ進んだ。

紗枝は、怪訝な顔をして、栄次の後へとついていった。

*

栄次は駅前のショッピングモールを抜けて、繁華街に進んでいった。

そこを通り過ぎ、公園や寺院の連なる大通りの歩道をすたすたと歩いた。

二〇分、二人はそのまま真っ直ぐ歩き続けた。

そして、栄次はまだまだ先へと進んだ。

大通りから小道に入り、入り組んだ京の町並みをずんずん歩いた。途中、栄次は大学の授業や試験について、紗枝に話しかけた。別にここで話さなくてもいい会話だった。

彼は今から行く所については、何も話してくれなかった。

「ねえ、栄次。それよりどこに行くの？」紗枝は何度が聞いた。

「まあまあ」

といって、栄次はなおも勝手に先に進んでいく。

紗枝は段々、だまされているような気がしてきた。

紗枝は栄次の背中を見つめて、思った。

栄次って、いつもあたしをおちよくるのが好きな奴だ。

今回だって、呼び出しておいて、どこに行くのかも教えてくれない。

もしかして……歩きまわったあげく、「これが運動」とか言ったりして？

あたしって、栄次のおもちゃ？

紗枝は失恋で、少々、被害妄想気味だった。

みんな、また、あたしを馬鹿にするのかな？

今朝の夢といい、なんなのよ、みんな。

……なんだか惨めになつてきたよ。

紗枝はじつと、栄次の背中を見つめたまま、涙ぐみはじめた。

そのとき、栄次がくるりと後ろをふり向いた。

紗枝はどきりとした。

「なに？」栄次が尋ねた。

「いえ……」紗枝はいった。

「いぶかしんでるな？」

栄次はにやつと笑っていった。

それを見て、紗枝はぴくりと眉を痙攣させた。

紗枝は立ち止まった。そして、下を向いて、黙り込んだ。

栄次は面白がって、背中を曲げて、覗き込むように紗枝の顔を見ようとした。

すると紗枝はすつと顔をあげ、栄次を正面から見つめた。

「！」栄次はどきりとした。

「……………」

紗枝は栄次を見つめながら、思い直した。

確かに、いつもならくつてかかるところだけど、

「一生懸命努力して、綺麗になる」と宣言したのはあたしで、栄次はそれを手伝うといってくれているんだ。

信じなくちゃ。

「ううん。別に。頼りにしてるよ」

紗枝はいつて、自ら先へとずんずん進んだ。

「栄次。ほら行こう！」

「……………」おう

栄次は白い息を吐いて、紗枝の後ろ姿を追いかけた。

*

それから更に歩くこと十五分。風が出てきて、二人は身を縮こまらせた。

「うう、寒い」紗枝はいった。

雨が降ったら、確実に雪になる気温だった。

「もうちよつとだよ。あ、ここだ」

栄次が紗枝を呼んだ。彼は、ひとつのビルを指差した。

「何？ 第五ナガタビル？」

紗枝はその十階建てのビルを見上げた。
そのビルは真新しく、大通りから少し裏手に入ったところに建っていた。

百貨店や繁華街が近い割に、人気は少ない。

「ここの八階な」

栄次はにっこりと微笑んだ。

二人はビルの正面玄関を抜け、緑色の廊下を進んだ。
突き当たって右手にあるエレベーターの前に着いた。栄次が上
きのボタンを押した。

エレベーターが来るまで、栄次はゆうゆうと鼻歌を歌っていた。
紗枝には、これは意外な展開だった。

ちょっと待って、お洒落なショップがあるようなビルでもないし。
むしろ企業用のビルじゃないの？

栄次はあたしをどこに連れて行くの？

そうこう思っているうちに、エレベーターが下りてきて、扉が開いた。

「ほら。乗って乗って」

栄次は紗枝をボックスの中に押し込んだ。

栄次は八階のボタンを押した。やはりご機嫌な表情だ。

「栄次……そこに何があるのよ？」

たまりかねて聞いたそのとき、紗枝はぎょつとした。

栄次が隣にいないのだ。

「ち、ちよつと待てー！」

紗枝はあわてて、閉じかけたエレベーターの扉を、両腕で強引に
押しとどめた。

「おいおい！」

エレベーターから降りていた栄次は、扉をこじ開ける紗枝をびっくりして見た。

ぎぎぎと扉を押し広げ、紗枝が、怯えと怒りを入り混ぜていった。「ちよつと？　栄次は来ないの？」

「ここから先は、男人禁制なのです」

ちーんと栄次は合掌し、仏のような顔立ちで、紗枝を見てふふつと笑う。

紗枝は呆れてぼかんとした後、栄次をにらんだ。

「何よそれ」

「行き先は姉の職場」

「ええ！」

「大丈夫。姉貴に話はつけてあるし。

嫌だと思ったら、すぐに断って帰ってくればいいさ」

「ちよつとつ、何それ、余計に怖い」

紗枝は涙声になった。

「達者でな」

ひらひらと手をふる栄次の姿は、もろくも扉に遮断された。

紗枝を乗せて、エレベーターは上へとあがり始めた。

*

《ポーン。八階です》

調子の外れた、明るい電子音。

「うう」

エレベーターの壁に手をつけ、紗枝はうなだれた。

しかし、着いた以上、先へ進まなくては、話が弾まない。

「仕方ない」

紗枝は覚悟を決めて、八階フロアに降り立った。

第四話 着いた先で、エトセトラ

エレベーターを降りると、紗枝はまず異変に気づいた。

「何？　すごくいい香り」

どこからともなく漂ってくる花の香りが、八階全体を包んでいた。ここは一体……？

紗枝はどきどきしながらあたりを見回し、また正面に向き直ると、細い廊下の向こうに小さな看板がひとつ見えた。

結婚式のウェルカムボードのような、かわいらしい看板が。

『こちらへどうぞ』

と指示している。

矢印どおりに右に曲がると、とつぜん豪華な扉が目の前に現れた。

「わっ」

紗枝は一瞬、目がくらんだ。

精巧なガラス細工でどこされた、まばゆいばかりに、輝く扉。

扉の前には、傘立があつた。竹製の編みカゴで、亀甲編みがとても美しい。さらに木彫りの小鳥とバラがそこにちりばめられている。なんて綺麗……

紗枝は感動してほうつとなつた。

こんな素敵な扉と傘立の前に立っていると、その雰囲気に乗じて、どこからかせせらぎの音が聞こえてきそうだった。

すると

「しゃわしゃわ」

ええ！

紗枝は耳を疑った。

今、確かに聞こえたわ、澄んだ小川のせせらぎが！

紗枝はあわてて目をこすって、落ち着いて目の前の物を凝視した。扉と傘立ては、本物である。そして小川はどこにもない。

「びつくりした。なんで小川のせせらぎが……」
紗枝は自分の耳をもみながら思った。

でも、本当に信じられない。都会のビルの一室に、こんな情緒あふれた場所が存在していたなんて……

紗枝は扉を見つめ、その奥を想像した。

段々と紗枝の胸の中で、不安よりも扉の先を見たいという好奇心がうずいてきた。

思い切って紗枝は、その秘密の園につながる扉を押し開いた。

「カランカラン」

鈴の音が鳴り響き、扉の向こうから、花の香りがいつぱいに吹いてきた。そのさわやかな風が、紗枝の頬をなでて去った。

花の香りの出どころはここだったのね。

花の香りに慣れると、あたりがクリアに見えてきた。

紗枝は中を見回した。彼女はちょうど今、玄関口に立っていた。品のいい、こじんまりとしたカウンターが、玄関口のすぐ先にあった。

『御用の方は、このベルをお鳴らし下さい』と、美しい文字で書かれたポップと、教会で見かけるような鐘が、手のひらサイズで金色に輝いている。

紗枝は靴を脱ぎ、中に入った。きよろきよろとあたりを見回した。部屋全体は、ブルーが基調なのね。なんて爽やかな……

さらに周りを見てみると、右手奥と左手奥に、ギリシャ建築調の扉があった。

この建物の造りを想像すると、右手の方に、たくさん部屋がありそうだった。

壁のいたるところに、細長い全身鏡がはめ込まれていて、いつで

も自分の姿が見えるようになっていた。

紗枝はカウンターの奥をのぞき見ようと体を伸ばした。

しかし、カウンターの奥はブルーのカーテンで仕切られていて、中は見えない。

しかし耳を澄ませると、その奥から、フェアリーのような可愛らしい声が響いている。

紗枝はもう、先ほどまで寒空のなか外を歩いていたのを忘れそうだった。

「は！ いかんいかん」

紗枝ははっと、また我に返り、もう一度慎重に部屋の隅々を見渡してみた。

きちんとそろえられた、お洒落で柔らかなスリッパ。

みずみずしく育った、観葉植物。

その隣には、モダンなガラステーブルと、豪華なソファ。

そしてガラステーブルに置かれているのは、真空保存のバラの花。左手の壁にかけられている絵画。

「これは……シャガール」

紗枝は感動で、胸が熱くなった（彼女はシャガールの大ファンだった）。

そして、その隣には、美顔機のポスター。

あれ。

壁にインセットされた棚の中。化粧水とクレンジングが。うろろ。

棚の下段、美容液のテストと、顔パックの試供品が。

「……………」

紗枝は、たらたらと汗をかき始めた。後ろの壁の角を見た。

ランジェリーを着た、頭の無いマネキン人形が立っている。

このあたりで紗枝は、秘密の園は、秘密なものではなかったことを理解し始めた。

あしからず、紗枝はこの世界をまったく知らないわけではない。だが、来たことは一度も無かったのだ。

「か、帰ろうかな」

と、思ったとき、誰かが紗枝の左手を、かしつと掴んだ。

「ひゃっ」

紗枝は驚いてそちらを振り向いた。そして衝撃を受けた。

「今井、紗枝さん、ですね？」

彼女の唇からは、深い花の香りがした。

紗枝の右手を掴んだ相手は、目もくらむような、美女！

小顔で純白の肌をした、二重の瞳が大きい女性が微笑む。

髪はオレンジブラウンで、艶やかで長い巻髪（もちろん縦）。

アンジェリーナ・ジョリーのような豊満な胸に、すっと伸びた、ハル・ベリーののような脚。

そして美女は、ナースの服をまとっていた。

紗枝はすっかり緊張してしまい、赤面して言った。

「はい……あの、ここって……？」

うすうす分かっていたのだが、紗枝は確認のためにたずねた。

美女は口角を綺麗にもちあげ、目を細めて紗枝にいった。

「エステティックサロン、『ビューティー』です。」

わたくし、店長の牧野です。今日はお越しいただき、ありがとうございます」

女でもうつとりするような笑顔で、牧野栄次の姉、牧野恵理子は、ナース姿で紗枝を魅了した。

第五話 それではここで初体験

「栄次から話は聞いていたから、とんとんとんと、進めちゃいましようか」

カウンター（は受付窓口だった）前のソファに座り、ガラステーブルに置かれた半永久的に枯れない真空保存のバラを見つめ、牧野店長は話し始めた。

紗枝は、出された暖かいカモミールのハーブティーを一口飲んだ。
「今回は、痩身でこられたんですよね？」

店長が微笑んでたずねた。

「えーと……」

紗枝はどぎまぎしていった。

店長の美声とは裏腹に、ぎこちない返事で紗枝は下ばかり向いている。

「紗枝さん、もしかして緊張してます？」

おもむろに、店長が尋ねた。

「ええと……はい。い、いえ！」

実は栄次から詳しい事は何も聞いてなくて

「ああそうだったんですか。意地悪な弟で申し訳ありません」

ほほほと笑って、牧野店長は一瞬にして、部屋の雰囲気は爽やかにした。

すごく綺麗に笑う人だなあ……

紗枝は店長の笑顔に感動しつつ、うらやましいと思った。

「ほらほら紗枝さん。背中を曲げると、血流が滞っちゃって、新陳代謝が鈍くなっちゃいますよ」

店長が、紗枝の背中をぽんぽんと叩いた。

「肩こりとか、大丈夫ですか？」

「あ、そうですね、最近ちよっと辛いかな」

紗枝は右肩をさすっていった。

「あらまあ、それは大変ですね。

どうです、話は後にして、一度、こちらの体験コースやってみませんか？」

「え？ マッサージとかですか」

紗枝は驚いて尋ね返した。

「そうですね。インドマッサージとか、リンパマッサージとか、ソルトマッサージとか。

色々種類がありますけど。体験なら、まずはインドマッサージがお勧めですね」

「えと……インドマッサージとは……」

紗枝の頭の中には、サリーを着たインド人女性と、バリ島の黒人女性の姿しか思い浮かばなかった。

「体の血流をよくするための、全身マッサージで……」

うーん、説明するより、一度やってみるのがいいですって。さ、どうぞ」

「え、えっと」

紗枝はだんだんと、店長が話す専門用語と、魅惑的な店の雰囲気、理性をなくしそうになってきた。

何か怖いよう、逃げたい！

紗枝は泣きそうになって目をぎゅっとつむった。

そのとき、

《本気できれいになりたいんだな？》

栄次と誓いを立てた、あの部屋の光景が、紗枝の頭をよぎった。

「……………」

目を開いて、紗枝はぐつと下唇をかんだ。

「紗枝さん？」

紗枝の顔を覗き込んで、店長が優しくたずねる。

「……はい、じゃあ、どうやってやればいいんですか？」

めいっぱいの勇気で、紗枝は店長の顔を見つめ返していった。

「じゃあまず、向こうの部屋でお着替えしていただけますか」

につこりと微笑み、店長がバスタオルと、ブルーの紙ナプキンを紗枝に手渡した。

紗枝はどきどきしながらそれを受けとった。ノドはからからに乾いていた。

*

「どうでした？」

ソファに座って、新しいハーブティーを紗枝の前に置き、店長はたずねた。

「はい……あ、ありがとうございます」

紗枝は少しぼんやりとして、ソファに身を沈めていた。

彼女の体は、温泉帰りのようにほこほこに温まっている。

マッサージを受けてみて、紗枝は明らかに体に変化を感じた。服が心持ちぶかぶかしている気がする。

「すごいです。足とか腰が、あんなに細くなるなんて」

マッサージ後のシャワー室で見た自分の身体のラインを、紗枝は思い出していた。

「紗枝さんが、変化の出やすい体だったというもありますね」

微笑んで、店長はカルテをめくりながら、紗枝にいくつか質問をした。

「紗枝さん、何か運動とかされてました？」

「あ、はい。テニスとバトミントンを、学生のときに」

「へえ、じゃあ今も？」

「いえ、今はやって無くて……」

「ふんふん、じゃあ、ちょうど今、大学一年生だから、そろそろ代謝が落ちかけてくるのかなあ」

店長は唇をとがらせていった。

「あ、そうなんですか」

「うん、身体の代謝は、大体二十歳から落ちてきますからねえ。だからそこから、いかに急激に落とさないかが、大事になるんでくるんです」

「へえー……あのね、牧野店長？」

紗枝はためらいながら、店長の話を一度、切った。

「何ですか？」

「私、最近よく考えるんですけど、ここは外見を綺麗にするところですよ？」

「ええそうですね。外見を綺麗にする、それはまた、体の中からお客様を綺麗にしていくという事。『ビューティー』では、お客様の体質改善を目指していますの」

「えっと、それは、メイクとか強引なダイエットとかで、一時的に綺麗に見せるだけじゃなくって、健康的に痩せるってことですか？」

「そうです。健康的に痩せなくっちゃ、意味ないじゃないですか」

牧野店長は続けていった。

「今日体験していただいたインドマッサージも、リンパの流れをスムーズにして、血液の循環をよくし、脂肪燃焼を促進させています。これ続けることにより、痩せやすい体にしていくことを目的にしていますの」

「はあーすごい」

店長のトークに紗枝は感動した。

「紗枝さんは、今日施術に入らせてもらって、やりがいのある体でしたよ」

「ええ、どのあたりがですか？」

「足とか長いし。ちよっと太ももの筋肉が固まっちゃっていて、頑固なセルライトがあっただけど、頑張ってほぐせば、すっとした綺麗な足になりますよ。」

「……足が長いなんて言われたの、初めてです」

「ええ、ほんとですか」

「……………」紗枝は目を伏せ、黙りこんだ。

「どうしたんですか？」

「いえ……やっぱり、人って外見重視なのかなあって思って」
紗枝はうつむいたまま、つぶやいた。

「最近、好きな人に告白したんですけど……フラれちゃって」

「あら、なんて男」

「その人、すごいかつこよくて、優しくて。」

結構、仲よかったんですけど……

でも、私とは『そんなんじゃない』って。

性格が、合わなかったんでしょうか……

それとも私が可愛くなかったからかなあ」

「紗枝さん、外見にコンプレックスとか持ってます？」

店長がきいた。

「うーん、はい。めっちゃ持ってます」

「こんなに可愛いになえ」

牧野店長は紗枝の頭をなでた。

紗枝は恥ずかしいような嬉しいような気持ちではにかんだ。

「外見って、何なんでしょうねえ」

紗枝はつぶやいた。「内面より、外見のほうがよく見られるのかなあ……………」

「私の意見ですけどね」

店長が前置きをした。

「はい」

「やっぱり、見た目は大事ですよ」

紗枝の胸がズキンといたんだ。

しかし、店長はそんな紗枝に、やさしく微笑みをもって続けた。
「『見た目は重要じゃない。大事なのは心だ』という人は、外見への劣等感からそういつているのではないかと、私はつい疑ってしま
うんですね。」

何をごまかそうが、大事ですよ、見た目は」

「うっ」

紗枝はうなだれた。

「でも、考えてみて、紗枝さん。

誰しもみんな、好きな俳優を見てうっとりしたりするじゃないですか。

きれいな人が隣にいと、エネルギーをもらったりしません？

外見は大事なんですよ。特に『第一印象』という点においては「え？」

紗枝は店長の顔を見つめた。

第六話 体と一緒に「こころ」も磨こう

「え？」

紗枝はきょとんとして店長の顔をみつめた。

店長は凜々しくいった。

「確かに、第一印象の良し悪しというのは、大幅に外見から判断されるなと思います。

でもね、その先、相手といい人間関係を築くかという話になると、外見だけじゃもたないと思うんです。

長く付き合っていくとなると、『こころ』の比重が大きくなってくるんじゃないかしら」

紗枝はうなずいた。

店長は続けた。

「だからね、外見と同じく内面も大事だと私は思います。それにね紗枝さん。両者って、実は切り離せないものなんですよね。

たとえば、昨日まで一緒にスーツを着て働いていた同僚が、ある日、ぼろぼろの、くっさいＴシャツと、破れたジーンズで出勤してきたら？

みんな、『どうしちゃったの、あいつ？』って思いませんか？

その人を見る目が、何かしら変わるでしょう」

「うん、確かにそうです」

紗枝はいった。

「つまり、『どうしたの？ 何かあったの？』と、内面について考えるんですよ」

「ああ、ほんとだ！」

紗枝は手をつった。

「みんな、内面と外見が、ある部分でつながっていることを、ちゃんと分かっているわけです。

そうすると、内面の充実度というのは、自然と外見にも現れてくるのだと私は思います。

私たちエステシャンは、お客様の外見を磨いていくのと同時に、内面を磨くお手伝いもしているんです。

そうしていきたいんです」

「はい、すごい……そう聞くと、私……」

段々と紗枝の表情に、生っ粋の明るさが戻ってきた。

「店長、なんだろう、私、とにかくもつと綺麗になりたいです!」

「えらい!」

店長がパンとひざを叩いて、ソファから立ち上がった。

「ちよつとこつちへ、紗枝さん」

店長は左の壁の扉を開き、小部屋に紗枝を押し込んだ。

「て、店長」

紗枝はどぎまぎした。

狭い部屋で、二人は顔がくつつく位に近づいた。

うわあ、ほんとに綺麗な肌!

紗枝は顔を赤くした。

店長の美しい顔が、紗枝の十センチ目の前にある。

こんなに綺麗なら、男じゃなくてもときめくよ!

彼女に惚れそうな紗枝の手をとって、店長は真面目な顔でいった。

「その言葉、待ってましたよ、紗枝さん。」

そんな男のことは忘れて、ドカーンと綺麗になりませんか」

ドカーンと?

紗枝は少し、引きつった笑いを浮かべた。

「えーと、つまりは?」

秘密を耳打ちするようにひそひそと、しかし興奮して、牧野店長はいった。

「集中コースを組んで、体質改善しちゃうんです」

「コース!」紗枝は小声で驚きの声を上げた。

店長が紗枝の手を強く握った。

「やる気のある人は、大歓迎です。

弟からも、熱心な子だって聞いてましたし。

店長の権限をフルに使って、あなただけの特別メニューを作っちゃいます」

そう言い切ると、牧野店長はまじめな顔になって、紗枝の顔をじつと見た。

「紗枝さん。でもね、さっきの話なんですけど。

人って絶対、もともと綺麗なんですよ」

「え？」

紗枝はきょとんとして、店長の顔を見た。

店長はにっこりと微笑んで、もう一度いった。

「人って、もともと綺麗なんです。

私たちはね、紗枝さん。エステで何をしているかといえば、生活習慣等でゆがんだ身体を元に戻す施術をしているんです」

「ゆがみを治す施術ですか？」

「そうですよ。だからもともと持っている、その人本来の綺麗な体に戻していくんです。

紗枝さんはもともと綺麗なんですよ」

「私がもともと綺麗なんですか……」

紗枝は、ドキドキしながら真摯に店長を見つめた。

店長はいった。

「私は、外見とは『外見ファクター』であって、

『視覚的コミュニケーション』だと思っています」

「そとみファクター？」

つまり、見た目因子？

すごい言葉だなあと、紗枝は思った。

「外見ファクターを磨いて、いつそう綺麗なあなたに近づきましょう、紗枝さん」

そして紗枝の手を握っていた店長は、ついには紗枝の両肩に手をおき、きらきらとした瞳で彼女を見つめた。

「がんばりましょう！」

「……はい、店長」

紗枝は力強くうなずいた。

「決めました。」

あたし一生懸命、綺麗になります！」

第七話　ますますナースはヒートアップ

「店長、よろしく願いします！」

「まかせて紗枝さん！」

というわけで、スタッフの皆さん。カモーン！」

「へ？」

紗枝は意表を突かれて固まった。

店長が背後のブルーのカーテンをシャットと開いた。

なんとそこには、店長と同じく、ナースの格好をしたスタッフの面々が。

十人近く、ずらりと並んでいる。

二人の会話を覗き見していたのだ。

「おお、皆さん神々しい！」

紗枝はまた、クラリとめまいを起こした。

店長に負けないほど自信と後光に満ちたスタッフが、

「はじめまして、紗枝さん」と、一斉に挨拶をした。

「私の自慢のスタッフです」

そういつて、店長もその団体の中に入った。

「はっつ！」

紗枝はまぶしさにあてられてしまった。

店長を筆頭にした、あまりにも美しいエステシャンたち。これで、

一枚の絵画が出来上がりそうだった。

「紗枝さん、話は聞いてました。一発、綺麗になりました」

澁^{はつ}渌とした声で、一人のスタッフが紗枝に歩み寄ってきた。

歳は三十代くらい。

落ち着いた雰囲気、比較がっしりとした体格の女性だ。

背が高く、水泳選手のように肩が厚い。茶色い髪はショートカット。

形のいい耳に、ダイヤのピアスが光る。
エステシャンにはめずらしく、健康的な焼けた肌。その笑顔には、
透き通る白い歯。

紗枝はこのエステシャンに、自分と通ずる体育会系のノリを感じ
取った。

店長が進み出て、彼女を紹介した。

「紗枝さん、こちら、チーフの中島先生です。」

先生は東洋医学に長けていて、ここではモンテセラピーを担当し
ていただいています」

「モンテセラピー？」

「東洋医学の知識を使った、頸椎や体中のツボを刺激して、体の内
からゆがみを治していく施術です」

店長はいった。

「このエステは、西洋・東洋混合でやってますからね。効果の出
は早いですよ」

中島チーフは微笑んでいった。

そしてしゃがみこみ、紗枝の身体を触り始めた。

「ひゃっ」

「大丈夫、そのままじっとしてください」

中島先生は、もうすでにお仕事モードに入っていた。

「はあ、何でしょう、私、これからどんなことをするんですか？」

されるがままになりながら、紗枝は尋ねた。

「そうですね、紗枝さんは、腰周りと足の集中コースがいいかと。」

足は、そうですねえ、筋肉質で太ももの厚みが気になりますので

……

『スペシャル』いつときましようか」

スペシャル？ 紗枝は内心びくついた。

「うん。そうですね」

店長が力強くうなずく。

「外からの刺激で、固まった筋肉と、その間に挟まったセルライトをほぐしていく強力なマッサージです。

やわらかくほぐせば、その筋肉も正常な位置に戻していけますし、どんどん細く、綺麗な足になっていきますよ」

中島チーフはにっこりと微笑んだ。

店長が続けていった。「あと、ウエスト。もうちよつとくびれが欲しいですね」

「そうですね、じゃあそのあたりはソルトマッサージで脂肪燃焼がいいでしょうか」

中島チーフと牧野店長が、どんどん紗枝用カルテを作っていく。

「ああ、あの、店長」

紗枝がその勢いを一時シャットダウンして、店長に尋ねた。

「はい？」

店長はカルテから顔を上げて、聞き返した。

紗枝は遠慮がちに尋ねた。

「それですね、その、気になるところの……お値段は？」

「ああ、そうでした」

そのことに今思い出したようで、店長は、ぽんと手をたたいた。すると、後ろのスタッフの一人が、さっと電卓を持ってきた。

「まず、コースとしましては」

軽快なリズムで、店長が電卓を叩く。

「大体、三ヶ月コースが通常でして。

紗枝さんは、短期集中型で、三ヶ月コースを組みたいと思ってるんです」

「ふんふん」

「ちようど体の細胞がすべて入れ替わるのが、三ヶ月ですからね。安定期も入れていくとなると、もうちよつと伸ばしたいけど……」

ま、とりあえず三ヶ月でいきましょう」

「はい、なるほど」

「で、お値段ですが」

「はい」

紗枝は「ごくりとつばをのんだ。」

「二十万ですね」

「」

まず、絶句。それから口を半開きにして、紗枝は焦点の定まらない瞳で天を仰いだ。

なにしろ紗枝は大学生。普通の貧乏大学生なのだ。

しかし、紗枝は天井をしばらく見上げていた後、勢いよく頭を戻し、凜々しい瞳で店長を見つめた。

「分かりました、工面してきます」

「かつこいい！」

店長が手をたたいた。

「紗枝さん、素敵！」スタッフ全員から、拍手喝采があがった。

店長は紗枝をぎゅっと抱きしめた。

「紗枝さん、間違いなく綺麗になりました！」

店長に抱きしめられたまま、紗枝はじっと黙っていた。

下唇を軽く噛み、自分を落ち着かせるように、何度もうなずいた。どきどきが治まらない。

紗枝は服の上から胸を押さえた。

彼女は一步を踏み出した。

そう、紗枝は今、新しい世界に挑戦し始めたのだ。

*

胸ポケットに入れてあった携帯のバイブが震えたとき、栄次はちよつどドライブウェイで休憩していた。

「あ」

携帯のメールを見て、栄次は小さくつぶやいた。

時刻はもう夕方、山道に作られたドライブウェイから見える夕

日は、はるか向こうの海の中に沈んでいく最中だった。

バイクをなでながら、栄次はメールを丁寧に読んだ。

メールは、紗枝からだった。

《栄次、ありがとー！ 今日店長に色々話聞いて、さっそく、ダイエツトはじめることになりました！

紹介してくれて、ほんとありがとー》

「おお」

栄次はメールを読み終わり、少し複雑な心境を抱いた。

多分、結構なコース、組んだんだろうなあ。

「まあ、体壊すよりはずっといいしな。姉貴もいるし、安心だ」
独り言をいいながら、栄次は紗枝に返信メールをうった。

《無理しすぎんなよ》

送信を確認して、栄次は携帯を閉じた。

胸ポケットにしまいなおすと、ゴーグルをはめ、エンジンをふかした。

そして、彼女との夜のデートの待ち合わせ場所に向かって、大きくバイクのハンドルをきった。

第八話 まるでVIPなお姫様

三日後、いよいよ紗枝のエステコースが始まった。

「こんにちは」

紗枝は、エステサロン『ビューティー』の扉を軽快に開いた。カランカランと、扉の鈴の音が紗枝を出迎えた。

「あつ紗枝さん、こんにちは！ 今日からですよね」

中島先生が受付カウンターから、オリエンタルな笑みで、紗枝を出迎えてくれた。

「はい、よろしくお願いします」

紗枝は笑顔で答えた。

今日から始まるんだ、初めてのエステ！

紗枝はどきどきしながら、会員カードを中島先生に渡した。

「はい、じゃあこちらにお着替えください」

体験コースの時と同じように、バスタオルと紙ナプキンが渡されて、紗枝は更衣室に案内された。

「やっぱりゴージャス」

更衣室に入って紗枝は荷物をロッカーに詰め込むと、あたりを見回した。

この前は緊張してすみずみまで見れなかった更衣室を、今日紗枝は改めてじっくり観察した。

そして改めて紗枝は、玄関から受付、そして更衣室、このエステサロンの隅々にちりばめられた美意識の高さに感銘を覚えた。

更衣室の手洗い場で、紗枝はリポーターの気分で、独り言のコメントをつぶやいた（周りから見ればかなりイタイ子だ）。

「わー、すごいですねー。この蛇口……やっぱり、金でしょうか？

この照明ライトの笠、巻貝模様でかわいいです！ それに上品。椅子なんて革ばりですよ……」。

この化粧水と美容液。一本一万円以上もするのに、自由に使っているなんて。

うーん、ここに来るだけで、刺激がいっぱい……誘惑も、いっぱい」

ちらりと紗枝は化粧水と美容液を見つめた。

「いや、ダメだ！」

紗枝は、化粧水と美容液を、自前の小瓶に詰めて帰りたい欲望を抑えた。

美意識の高さとは、誇りの高さでもある。

普段なら何とも思わないセコイ根性も、ここでは萎^なえていくのだ。「そうよ、これよ。この気高さよ」

紗枝は握りこぶしをつくっていった。

確かに、これほど洗練された美意識の高い空間に入ると、紗枝の美意識も自然と高まってくるようだった。

そのとき、更衣室のガラス扉がノックされた。

「紗枝様、紗枝様、ご準備できましたらどうぞ」

紗枝様！

更衣室の向こうから響く、優しいスタッフの呼び声が、紗枝をますます、お姫様気分仕立て上げてくれる。

紗枝は急いで服をすべて脱ぎ、紙ナプキンをはいてバスタオルで身体を包んだ。

「すみません、お待たせしました」

紗枝が扉を開くと、そこにはカルテをもった小柄で可愛らしい先生が立っていた。

紗枝はどきりとした。

きゃー、可愛くて綺麗！

身長は一五〇センチくらいだろうか。

濃いブラウンの髪は背中まで伸びて、後ろで一つにくっつてある。毛先は可愛くカールしており、ケアがしっかりしているので、天

使の輪ができた、瑞々しい髪をしていた。

小さな顔に、大きな二重。

淡いリップの塗られた唇の口角が、可愛く持ち上がる。

「はじめまして紗枝さん。私、横美^{よしみ}祢^ねといいます」

「あ、はじめまして。今井といいます」

紗枝はぺこりと頭をさげた。

すると、横美祢先生が紗枝の手を、がしつと握った。

「ひっ？」

紗枝は思わず声を上げた。ずずいと、横美祢先生が紗枝に迫った。

「聞きましたよ、紗枝さん。今回特別コースを組んだんですって？

私、とっても感動しました。

店長と同じ気持ちで、紗枝さんの美改革の応援させていただきま
すね！」

目をきらきらと輝かせ、横美祢先生は意気込んでいった。

「は、はい。がんばります！」

ひえ〜。

紗枝は横美祢先生の気迫に押されて、背中をそらせた。

「あら、ごめんなさい。つい力が入っちゃって」

横美祢先生は手を離して、また可愛いナースの雰囲気に戻っ
た。

「ではこちらへどうぞ」

そして紗枝を廊下の奥に招いた。

「は、はい」

紗枝はバスタオル一枚で、横美祢先生の後について歩いた。

第九話　ゴーイング・バスルーム

二人は、両側に扉が連なる細い廊下を歩いた。

廊下の壁は、うす水色でさわやかな印象を紗枝に与えた。

そして紗枝は、廊下の突き当たりに通された。

そこには体重計があった。

横美祢先生が尋ねた。

「お手洗いは行かれますか？」

「あ、はい。行きまーす」

紗枝はぴくんと耳を動かして、返事した。

実は、紗枝はこのエステのトイレに入るのが初めてだった。

トイレの扉は、更衣室の向かいの壁にあった。

「じゃあ、ちよつとすいません」

「どうぞどうぞ、ごゆっくり」

横美祢先生はにつこり笑って体重計の前で待った。

んっ？

トイレの扉の前で、まず紗枝は、ドアノブが普通ではないのに気がついた。

トイレのドアノブなのに、まるで客間につながるような豪華じゅうしゃなノブなのだ。

なんか、トイレに行く感じじゃないなあ。

紗枝はドキドキしながらトイレに入った。

トイレは、小さな部屋くらいの広さだった。

トイレの中にも洗面台があり、そこもやはり更衣室並にゴージャスだった。

更衣室の洗面台と同じく、ここのも金の蛇口で、脇にはアロマ石鹸がおいてあった。

「ひゃー、どこもかしこも、やっぱり豪華」

紗枝はささやいて、それから便器を観察してみた。
曇りひとつない洋式便所。

フローラルな香りが広がっている。

紗枝は、ロールペーパーの取り付け口を見てみた。
ペーパーが差してある芯棒は、プラスチックではなく、なんと銀だ。ペーパーの上にとりつけられた笠は、花と小鳥の浮き彫り模様がどこかれ、こちらもやはり銀製。

「すごい……」

紗枝は感動しながら、ようやく当初の目的のために、便器の蓋を開けた。

すると、何と金箔が漂っている！

「うわ！ 輝いてる！」

紗枝は思わず便器に顔を近づけ、それを凝視した。

「ありえない、ありえないわ」

そういいながら、紗枝はちゃっかり便座に座った。
こんなトイレで用を足す者は、どこかの国のVIPしかありえないと思っていたのに、そのトイレを今自分が使っている。

紗枝はもう、自分が何者なのか、分からなくなってきたそうだった。

「ああすごかった」

トイレから出てくると、横美祢先生が十分間も待ちぼうけをくらって、体重計の前で待っていた。

紗枝は顔を青くして、ダッシュで体重計の前へ走った。

「す、すみません」

「ああ、紗枝さん。大丈夫ですよ、用は済みました？」

紗枝は顔を真っ赤にした。

別の意味に解釈されたおかげで許されたのが、逆に恥ずかしかった。

「では、体重をはかってみましょうね」

横美祢先生がいつて、紗枝を体重計の前にすすめた。

「は、はい」

紗枝は気を取り直して、背筋を伸ばした。体重は、紗枝が一番気にするところである。

ここのエステでは、施術前と施術後の二回、体重をはかる。

同時に体脂肪もはかるので、汗で体重が落ちたのか、それとも脂肪が落ちたのか、そこで判断するのである。

「はい、どうぞ」

横美祢先生がボタンを押した。

紗枝は体重計の前に立った。

そこではつとした。

体重計の前にも全身鏡がある。

自分の、ぼつちやりした脚を見つめ、紗枝は一抹の焦りと共に、決心をあらたにした。

ここから変わるんだぞ。

ファイト、あたし。

そして紗枝は、右足を体重計に乗せた。

「あ」

タオル分の四百グラムはちゃんと引いてくれてある。その細かな気遣いに、紗枝は感心した。

ちちち、と体重計が音を鳴らした。

紗枝の体重と体脂肪が、数値として現れた。

「う」

紗枝は声を詰まらせた。

この前、自分で家ではかったよりも太っている。紗枝は顔を青くした。

横美祢先生が、カルテにそれを記する。

「うん、ちょっと体重の割りに、体脂肪が多いかな」
先生はいった。

「ああ、そうなんですか」

紗枝はひやりとした。

「大丈夫ですよ、こちらに来る皆さんは、そこからきちんと痩せていくんですから」

カルテを閉じ、横美祢先生は微笑んだ。

紗枝はそれを聞いて、ほっと息をはいた。

「はい、じゃあ、こちらのお部屋にどうぞ」

横美祢先生が、突き当たりの右手の扉に手招いた。

「はい」

紗枝はツバを飲んで返事をした。

さあ、始まる。あたしのエステコース。

お金は絶対無駄にはしない。

ここであたしは綺麗になるんだ。

ゆっくりと扉が開かれる。紗枝は背筋を伸ばして、その先へと進んでいった。

第十話 セルライトの、ほぐし方

紗枝はときどきしながら、施術室に通された。

この前の体験インドマッサージでは、緊張のあまり半分パニックになっていたので、なかなか部屋の隅々まで見る事ができなかった。

今日は落ち着いて施術室を見ることが出来る。紗枝はこの部屋にあるものすべてを、興味をもって見回した。

その前に、エステサロン『ビューティー』の構成を説明しよう。

このエステサロンは、十二個の施術室があり、一部屋が大体三畳ほどの個室である。

各部屋で、マッサージや美顔、カウンセリングが行われている。

そのため、目的に応じて、部屋に備え付けてある設備が違う。

紗枝が通された部屋は、真ん中に大きなモスグリーンのベッドが備え付けられていた。

ベッドは表面がナイロンで包まれていて、汗をかいても、それ以上しみこまないようにしてある。

壁には、効果的にやせるダイエットのノウハウが書かれたポスターが貼ってあった。

その隣には、人間の経絡を全身図で説明したポスターがあった。

扉から向かって左脇に、小さな戸棚があった。アロマオイルと、ストップウォッチが置いてある。

横美祢先生が、扉を閉めていった。

「はい、ではタオルいただきますね」

「はい」

紗枝は、するりとタオルを身体からほどき、紙ナプキン一枚で立ち尽くした。

そのまま、ベッドに仰向けになるよう、すすめられた。

ゆっくりと、折った膝をベッドの上で伸ばしながら、紗枝は赤面

した。

こうやって、誰かの前に裸同然で寝ころぶなんて恥ずかしいなあ。

紗枝はまだ、エステに対して戸惑いをぬぐいきれていないようだった。

何せ紗枝は、体育会系だ。ダイエットと考えると、まずトレーニングする事を思いつく。

自分の身体は、自分で動かす。そしてエネルギーを消耗する。

ダイエットといえば、常に動くこと、能動的であり、そこに食事制限が入るのだと彼女は決めてかかっていた。

しかし、「誰かに触られる。自分が受身になる」という、このエステというダイエット方法。

それはまるで、紗枝には甘えのように感じるのだった。

「ええと、今日は何をするんでしょうか？」

紗枝は尋ねた。

「そうですね、今日は、『スペシャル』で、太ももをほぐしましょうか」

横美祢先生がいった。

出た、スペシャル。

「スペシャルは二人でやりますからね」

「え？」

そのとき中島先生が施術室に入ってきた。

「あ、中島先生」

紗枝は顔を上げて先生を見た。

「お待たせしました紗枝さん。今日は私が一緒に入らせてもらいますね」

白い歯をきらりとさせて、中島先生は笑った。

「こんにちは、紗枝さん。隣で私も、聞いてますから」

中島先生のうしろから、店長がひょっこりと顔を出した。

「あ、店長！」

「がんばってね、紗枝さん」

店長は微笑んで、扉の前から姿を消した。

「ではでは。紗枝さん、うつ伏せになってもらえますか」

中島先生はいい、戸棚からボトルを出して、オイルを手に塗り始めた。

横美祢先生もオイルをとり、紗枝の両足に塗り始めた。

わあ。なんだかいい香り。

そうか、今から二人で両足マッサージかな？

紗枝はベッドにおでこを押つけて、手は横に伸ばした。

そしてときどきしながら、マッサージされるのを待った。

が、次の瞬間、激しい音が部屋に響いた。

「べちべちべちべちべちべちべちべち！」

な、なにこれー！？ いっ、痛いよー！！

エステでは聞こえるはずも無いような音が、紗枝の両太ももから響いた。

二人のエステシャンが、紗枝の太ももを、両手で思いっきり叩き始めたのだ。

それはまるで、民族楽器の太鼓を叩く、原住民の宴のようだった。うそー！

紗枝は思わず歯を食いしばった。

こぶしを強く握る。

二人は激しく、紗枝の脚をはたく。

そして今度は、手をチョップの形にし、ずがずがずがと、またも彼女の太ももを叩き出した。

あいたー！

紗枝は涙ぐみそうになったが、ベッドにかじりついて我慢した。

「こうやって……、ね。固まった筋肉をほぐしていくんですよ」

息を切らせながら、中島先生は、なおも紗枝の太ももをひっぱたく。

そしてようやく叩くのが終わると、今度は紗枝の太ももを、繃帯でぐるぐる包み始めた。

「ええ、これは何ですか？」

紗枝はぎよつとしていった。

「この特別なテープで、ほぐした脚を、綺麗な形に整えるんです。そしてこれから三十分、サウナタイムになりますね」

横美祢はそういい、ベッドの脇のボタンを押した。

そして、ベッドの下から大きくて厚いサウナシートを取り出して、紗枝の体全体を包み始めた。

きやああー、これじゃあミイラじゃない！

紗枝は、シートに体を固定される自分の姿を、とても恥ずかしく思った。

そのうちに、ベッドがじわじわと熱を帯びてきた。

「それじゃあ、紗枝さん。また見に来ますからね」

二人のエステティシャンは、手をふって部屋から出て行った。

紗枝は一人部屋に残され、急にぽつんとなった。

沈黙すること、十五分。

「うっ……めっちゃ暑い。三十分なんてもたないよ！」

紗枝はうめき声を上げ始めた。しかし、時間まで紗枝は耐えた。

横美祢先生が様子を見に来た時、彼女はぐったりとなっていた。それでも紗枝はがんばった。彼女の根性は強かった。

そして、ミイラの恰好から脱した彼女は、なんと施術後、一・二キロもやせていた。

体脂肪も〇・四パーセント減っている。

「すごいです紗枝さん！」

横美祢先生は大喜びで、カルテに体重を記した。

「は、はあ。やりました」

体重計を降りて、紗枝はふらふらなまま笑顔を作った。
しかし……

ここって、ほんとにエステなの？

そして紗枝は、突然にやーっと笑った。

なぜだか笑いたくなっただ。

横美祢先生が、びくりとして紗枝に尋ねた。

「どうしました。気分でも？」

「いえ、大丈夫です」

すると今度は、紗枝は落胆するように笑って、ついには、背を反らせて、高らかと笑った。

それにつられて、横美祢先生も笑い出した。なぜだかおかしくな
って笑った。

涙目になりながら、紗枝は思った。

今後、エステティックサロンのイメージは、セルライトと共に碎
かれていくのだろうと、思った。

第十一話 ヤドカリの沈鬱

雪はふらねど、底知れぬこの寒さ。

大学生には、身も凍るこの時期。

一月の終わり、紗枝の大学では秋期試験が始まった。

その頃になると、試験の日程とレポート提出の課題が掲示板に張り出される。

まじめに授業に出ている生徒は余裕の表情で掲示をみつめ、出席日数の足りない生徒は試験とレポート提出で挽回しばんかいなければと、あせりを見せる。

大学の食堂では、栄次と紗枝がレポートの下書きにとりくんでいた。

「へえ、それはそれは」

シャープペンをノックしながら、栄次はくすくす笑っていた。

紗枝は顔を赤くして、小声でいった。

「あれが最近のエステなの？」

紗枝は栄次に、『スペシャル』について（話せる範囲で）事細かに説明した。

栄次は笑いこけて、腹をおさえた。

「めちゃくちゃだなー」

「めちゃくちゃよ！ でも痩せたわ」

紗枝は、そこだけは『スペシャル』に感心した。

「でも、あんなん毎回じゃ辛すぎる」

紗枝はさめざめと嘆いた。

「それだけじゃないよ。リラクゼーション・マッサージってのもあるし」

栄次は目じりの涙をぬぐっていった。

「詳しいわね」

「なにせ店長が、姉貴ですから」

「そう！ 牧野店長、サイコー・ビューディフォーよね！」

「なんやねんそりゃ。もうちょっと英語を勉強しなさい」

栄次はいつて、英語のノートを紗枝に渡した。

栄次は、英語ノートを写し始めた紗枝をほほえましく眺めて、いった。

「でも、楽しくやつてるみたいじゃん」

「まあ、確かに面白いわ」

そこは素直に認めて、紗枝は心の中で栄次に感謝した。

「でさあ、栄次。この授業のレポートなんだけど……」

紗枝はいいながら、鞆かばんから新しいノートを出した。

ついでに、自前のペットボトルも出してテーブルに置いた。

それに気付いて、栄次がいった。

「あれ？」

「え？」

紗枝はきょとんとして、ペットボトルのウーロン茶から口をはなした。

「炭酸系、やめたんだ？」

「ああ、うん」

紗枝はペットボトルを持ち上げて、いった。

「ジューズ一本でも、砂糖つて結構たくさん入ってるし。」

それに炭酸は骨を溶かしちゃうから、ほどほどにすることにしたの

「へえ」

栄次は頬肘をついて、紗枝をまじまじと見つめた。

紗枝はいつて、自分でうなずいた。

「生活習慣も変えていかなきゃって思っ

て。エステに行っ

てない時間は、あたしが体をケアしてあげなくちゃ、でしょ」

「うん」
栄次は感心して、うなずいた。

「一週間にどれくらい通ってんの？」

「週二。今のところ、それでコースが……」

いいかけて紗枝が、ぱっとテーブルの下に伏せた。

「何？」

ぎよつとして栄次がいった。

「大崎君よ」

テーブルの下から、小声で紗枝が返事をした。

紗枝はそれ以上何もいわず、巻貝の蓋を閉めたヤドカリのように、沈黙してしまった。

栄次は食堂の入り口を見た。

今、数人の学生が、食堂に入ってきたところだった。

「あ、ほんとだ」

栄次はつぶやいた。彼の足の下に隠れたヤドカリが、一瞬体を震わした。

紗枝をつつた、大崎君（紗枝に敬意を込めて、「大崎」ではなく、「大崎君」と呼んでおこう）が、こちらに向かって歩いてきた。

なぜなら栄次（と紗枝）が座っていた席は、注文を聞く学食のおばさんがいる、カウンターの目の前にあったからだ。

幸い、このテーブルは、丈が長めのテーブルクロスがかけてあり、栄次の足元にいる紗枝の姿は、誰にも見えなかった。

紗枝は、栄次のジーンズの破れを見つめながら、じっと大崎君の声を聞いていた。

「なんにする？」

大崎君の声が聞こえた。

「俺、カツカレーにしようかな」

多分、彼の友達だろう。野太い男の声が聞こえた。彼はいった。

「そっちは？」

「えー。あたしは、オムライスにする」

可愛い女の子の声が聞こえた。

「あたしは、パスタにしようかな」

もう一人、大人っぽい女性の声が聞こえた。

二人の声で、紗枝の胸が、どくと脈打った。

「ねー、大崎君は？」

可愛い声が、彼に尋ねた。

「そうだなあ。あやちゃん、オムライスなんだよね。俺も同じのにしようかな」

脈打っていた胸は、急激に萎縮し、ヤドカリは内側へと締めつけられた。

紗枝は下唇を噛んで、ぎゅっと拳を握った。

顔を赤くして、目線を床の方に落とした。

テーブルクロスと床の隙間から、白い光がこぼれて見えた。

そのすぐ向こうには、紗枝が告白した彼の靴があるはずだった。

大崎君は、学食のおばさんにオムライスを注文した。

栄次は、目の前の大崎君たち団体を、レポートを書くふりをしながら見つめていた。

別に、取り立てて変な会話ではなかったはずだ。

大崎君たちは、決して変な会話をしていたわけではなかった。

単純に、メニュー見て、何を食べるか考え、それを注文しただけだ。

だけど、栄次にはわかっていた。

この些細な会話が、どれだけ紗枝の気に障ったかという事を。

ヤドカリは、繊細な生き物なのだという事を。

第十二話 ?? トモダチ カレシ カノジョ ??

お盆に、オムライスと水の入ったグラスを載せて、大崎君は食堂の扉を押した。

彼らは二階のカフェテラスに行くようだった。

栄次は頬杖をついて、彼らの声に耳をすました。

声は次第と遠くなっていった。

栄次はテーブルクロスをつまんで、いった。

「もう行っただぜ」

「ほんとでしようね」

薄暗いテーブルの下で、紗枝は両膝の間に顔をうずめて、三角座りをしていた。

「イタい子に見えるから、お止めなさい」

栄次は同情をこめていった。

紗枝は、もそもそとテーブルの下から這い出てきた。

顔を赤くしたまま、栄次の向かいの椅子に、紗枝は腰かけた。

「何で隠れるの？」

栄次は、困った顔で尋ねた。

「何か……まだ今は、会うのが悔しいから」

紗枝は、目を伏して、いった。

「何、まだ好きなの？」

頬杖をついて、栄次はいった。

「好きというか……分かんない。好きなのかな、あたし？」

「俺に聞くなよ」

栄次はまた困ったようにして、首を傾^{かし}いだ。

紗枝はむうと、頬に空気を含んだ。

「んー、とにかく！」

紗枝は両手を広げていった。

「とにかく、何かこう。もっと綺麗になってから、ばばーんとお目見えしたいの」

「ばばーんと、ね」

「そう」

顔をますます赤くして、紗枝は栄次に訴えるように何度もうなずいた。

「そっか」

栄次は力の抜けたそっけない返事をした。

「そうなの、悪いの？」

「いや、悪くないけどね」

頬杖について顔を少し右に傾けていた栄次は、そのままの姿勢で紗枝の瞳をじっと見つめた。

「そのままでもいいのに」

紗枝のノドが、こくりと鳴った。

それは、まだ小さすぎて、栄次には聞こえない音だった。

「何よ。エステ、紹介したくせに」

腕を伸ばして、紗枝はゴツリと栄次の頭をパンチした。

「あいで」

栄次は、負けじと自分も、紗枝を小突いた。

「あいたー。女の子を殴る？」

「殴ったんだから、当然」

テーブルに、ようやく笑いが戻った。

緊張がほどけた様に、二人はけらけら笑い、お互いをバシバシと叩きあった。

食堂にいた何人かの学生が、二人を見ながら、くすくす笑っていった。

「ね、見てみて、あの二人」

「可愛いねー」

「ね……付き合ってるのかな？ あの二人」

もちろん紗枝と栄次には、彼らのひそひそ話は聞こえていなかった。

その時、《ががが》という音が、二人の間に割って入った。

「あ」

栄次は、手元の携帯を見た。

テーブルに置いてあった栄次の携帯が、バイブで振るえている。

「あ、彼女でしょ？」

紗枝はぴたりと手を止め、栄次に聞いた。

「おう、多分ね」

栄次は携帯をとり、メールを開いた。

すると、急に真顔になって、栄次は黙りこくってしまった。

「……」

画面に食い入る栄次を見ながら、紗枝はノートを片付け始めた。

紗枝が席を立ったとき、栄次は、はっと顔を上げた。

紗枝は微笑んだ。

「あたし次、授業あるから。栄次は？」

「あ、俺、次は休みだわ」

栄次はいった。

「そっか。じゃあまたね」

紗枝は手をふって、テーブルから離れた。

紗枝なりに気を遣ってくれたのが、栄次には嬉しくもあり、申し訳なくもあった。

「おう、また」

栄次は、はなれていく紗枝に手をふった。少し困ったような、寂しいような表情をして。

*

紗枝はそそくさと食堂を出て、教室へ向かった。

授業はもう始まっていた。紗枝は後ろのドアから、そつと教室に入った。

同じクラスの、エミの背中が見えた。

紗枝は静かにエミの隣にきて、椅子に腰かけた。

「あ。紗枝ちゃん」

エミが小声でいった。

「ごめんエミ。途中までのノートを見せてもらっていい？」

紗枝は手を合わせて頼んだ。

エミは紗枝の方にノートをずらして見せてくれた。

紗枝がノートを写している間、エミがそつとささやいた。

「ね。紗枝ちゃん。最近、牧野君と仲いいね？」

「え？」

小声で紗枝は、驚きの声を出した。

「大崎君のこと、吹っ切れたみたい……？」

「あー。うん、まあそれは」

困ったように、紗枝はいった。

紗枝は、あまり自分の恋愛について友達には話さない主義だった。

でも、噂は自然に広がっていくものだ。

エミは紗枝から聞かなくても、大崎君との事について、誰かから聞いて知っているのだった。

「でも、栄次とはそんなんじゃないよ。だって彼女いるし」

「えー、そうなの？」

エミが驚いた顔をしていった。

あ。やばい。シークレットをもらしたかも。

紗枝は慌てて、エミにいった。

「これ、秘密にしといてね」

「うんうん。もちろん」

エミは微笑んで、強くうなずいた。

約束は絶対に破られるだろうと、紗枝は思った。

紗枝からノートを返してもらったと、エミは再び授業に集中した。紗枝はノートを読み返ししながら、教授の講義を聞き流し、全く別の事を考えていた。

そっだよねえ。あんまり栄次と仲良くしてると、彼女さんに悪いかな。

紗枝は、まだ会ったことのない、栄次の彼女について考えた。

栄次の彼女が他大学の人だとは聞いていた。

なので、紗枝も大学での栄次との付き合いに、遠慮が無かったのは、確かだった。

友情と恋愛って全然違うのに。はたから見たら同じに見えるのかな……

紗枝は、となりのエミをちらりと見た。

エミには、あたしと栄次が付き合っているように見えたのかあ。

でも、友情と恋愛って全然違うよね……

紗枝はそう思いながら、大崎君と栄次を、交互に想像してみた。すると、やはり大崎君のイメージが、紗枝の胸を切なくさせるのだった。

あの、ドキドキしていた頃。好きだけど告白もせず、大崎君の姿を追っていたあの頃の気持ちに戻るのだった。

*

「あと十分で、食堂を閉めるよ」

食堂のおばさんが、テーブルを拭いてまわりながら、学生たちに声をかけた。

食堂に残っていた栄次は、開いた参考書とノートの前で、呆然と携帯の画面を眺めていた。

「何なんでしょうねえ」

栄次はその場で一人、ポツリとつぶやいた。

「あと五分で閉めますからね」

おばさんが栄次のテーブルにも来ていった。

「はい」

栄次は物憂げに笑って、携帯を閉じて、ノートをしまった。

第十三話 まきざし四センチの奇跡

「なるほど。じゃあ痩せたら、その彼に会うんですね」

牧野店長がいった。

施術室のベッドにうつ伏せでいる紗枝の腰を、細い十の指でツイストする。

「はい、何か目にももの見せてやりたいというか……」

うつ伏せのまま、紗枝は壁を見つめて、いった。

「そうですね。見せるんだったら、一度いっさい連絡を絶って、ある日突然、大変身した姿で登場するのがいいですねえ」

店長は声を弾ませた。

「ええ、ベタじゃないですか」

紗枝は苦笑いして答えた。

「サプライズは大事ですよ！

『デンジャラス・ビューティー』って映画知ってます？

サンドラ・ブロック主演の」

「いえ」

「一度見てください」

店長は微笑んで、次に、紗枝の腰から背中へとマッサージを移動した。

「紗枝さん、学校ではその彼と鉢合わせしたりしないんですか？」

店長が尋ねた。

「注意すれば、会わないですね」

紗枝は少し考えて、答えた。「もうすぐ秋期テストが始まるんですけど、テストのない授業なら、窓口へのレポート提出だけでいいし。」

それが終わったら春休みなので、まるまる二ヶ月会わないですみます」

「いい時期じゃないですか。春休みに再会する頃には大変身ですよ」

「えへ、そうですか」

紗枝は嬉しそうに、はにかんだ。

今日のマッサージは、『スペシャル』よりも軽い、ソルトマッサージだった。

ソルトマッサージのクリームは、天然塩入りで、触感は少しざらついている。

紗枝はそれでマッサージされるとこそばがゆかった。

「じゃあ紗枝さん。その彼のこと、まだ好きで諦めつかないんですね？」

店長が、紗枝の二の腕をマッサージしながら、彼女の顔を覗き込んでいった。

「いえ……好きというか、どうなんでしょう。」

好きなのかなあ、私？」

何だ、同じこといつてるような。

紗枝はあれあれと思った。

「あ……でも。」

何かですね、すぐく悔しかったっていうのはあります。

……フラれ文句がちよつとひどくて」

「なになに、何て言われたんですか？」

店長のマッサージする手の力が強まった。

「いやいや……」

紗枝は口をにごして、別の話題に会話を持っていた。

つい話の口火をきってしまったが、それについては、まだ誰にも言える気分ではなかったのだ。

隣の施術室では、この間紗枝がつけた、スペシャルマッサージの太鼓の音が響いていた。

そして、激痛で叫ぶ、お客の声が。

それを聞きながら、紗枝は最後の鎖骨マッサージをしてもらっていた。

顔を覆われたタオルの下で、紗枝は眉をしかめ、フラれ文句を頭の中で反芻していた。

あれは……ないんじゃないかなあ。

首筋に汗が流れた。

仕上げの全身サウナの間、紗枝は大崎君の姿を、苦々しく思い出していた。

*

「あ、紗枝さん。お疲れ様です」

更衣室から出たとき、横美祢先生がカウンターから声をかけた。

「あ、先生。ありがとうございます」

「今日はもう終わりですか？」

「はい。今日はソルトマツサージでした」

紗枝は先生から会員カードをうけとった。

そのとき、先生がじっと紗枝を見つめた。

「紗枝さん、ちょっと太もも、細くなつてませんか？」

先生が、まじまじと紗枝の脚を見つめた。

「ええ、本当ですか？」

紗枝は興奮して聞き返した。

「多分そうですね。ちょっとはかつてみましょうか」

先生は、カウンターから出て来て、紗枝の脇で腰をかがめた。ポケットからメジャーを取り出した。

「すごい、常に持参だ。」

先生は服の上から紗枝の太ももをはかった。

「ジーンズの分を差し引いて……」

紗枝さん、すごい、初めのときより四センチ減ってますよ！」

「ええ！」

紗枝はびっくりして、目を見開いた。

「すごいです紗枝さん」

先生は自分の事のように喜んだ。

「そういえば、ズボンがゆるいな」とは、思っていましたか……」
気のせいじゃなかったんだ。

紗枝はじーんとして、自分の太もを見つめた。

「それだと紗枝さん、服もイメージチェンジしたらどうですか」
横美祢先生が嬉々としていった。

「ゆるい服を着てるより、もっとタイトな服で、大人っぽくみせる
のもいいですよ」

「ええ。そうですかあ」

紗枝は顔を赤くした。

「うん。紗枝さん脚が綺麗なんだから、スカートとか、もっとはい
たらいいですよ」

「そんな、恥ずかしいですよ」

「大丈夫ですよ。」

なんなら、私と一緒に買い物に行きませんか？」

「えっ？」

「あら。何のご相談？」

カウンターの奥から、店長が出てきた。

「あ、店長。」

今、紗枝さんのサイズを測ったんですけど、太ももが四センチも
減ってたんですよ！」

「えー、紗枝さんすごいじゃないですか」

店長は口を縦に開いて、オペラ歌手のような顔で驚いてみせた。

「それで、新しい服でも、一緒に買いに行きませんかっ」

横美祢先生は、楽しそうにいった。

「あらずるい。私も行くわ」

「ええ、店長」

紗枝はぎょつとしていった。

「紗枝さん、これも美革命計画の一端です。
明後日の日曜日、買い物に行きましょう」

先生は紗枝の肩に手を置いて、力強く握った。

有無を言わさぬ勢いだった。紗枝を抜きに、あつという間に「週末買い物計画」が立てられた。

紗枝は店長と横美祢先生の携帯番号を教えてもらい、二人にも自分の番号を教えた。

待ち合わせ場所と時間だけ決めると、店長は、次のお客が入っているからと、急ぎ足で施術室に入ってしまった。

「じゃあまた紗枝さん。

スカートはいてきてくださいねー」

横美祢先生も、次のお客との時間が迫っていて、あまり話す時間もなく紗枝を見送った。

紗枝は呆然としたままエレベーターで下界に降ろされ、ビルの前で、ようやく冷静になった。

プライベートまで、お客と過ごしていいの？

信じられない、どうしよう。

そういうものの、紗枝はすでにわくわくしていた。

紗枝は、二人のエスプレッソの、休日スタイルを想像してみた。

急に日曜日が待ち遠しくなった。

第十四話 真冬に、網タイツ

日曜日。河原町通りの繁華街にある百貨店の入口で、紗枝は牧野店長と横美祢先生がくるのを待っていた。

待ちながら、紗枝は何度も、ショーウィンドウの鏡に映る自分の服装をチェックした。

とりあえず、もってる服の中で、一番可愛い服を着てきたけど……紗枝は不安とドキドキを入り混じらせて自分を見つめた。

赤のピーコートに、黒のハイネックセーター。

大振りのネックレスと、小さなピアスをつけてみた。

ただ、横美祢先生に勧められたスカートは、はいてこなかった。

「やつぱりなあ。無理があるよ」

脚を眺めながら、紗枝は独り言をつぶやいた。

タイトなストレートジーンズに、ショートブーツを履いた恰好。かっこう

今日の紗枝は（正しいかどうかは知らないが、）パリ風ファッションで、がんばってみた。

そして待つこと十分。背後で高らかとした声が聞こえた。

「ああ、いたいた。紗枝さん」

「あ、てんちょ……」

振り向きざま、紗枝はくらりとめまいを起こした。

極上の美人が二人、冬場にも関わらず、大腿だいたいむき出しで闊歩かつぱしてきたのだ。

店長は、ミンクの毛皮のコートを優美に着こなし、たいていの人
が陥る、成金趣味のいやらしさは微塵もなかった。

恐らくミニスカートをはいっているのだろうが、コートの方が長く、

それは完全に隠れていた。

それで、コートから覗く脚は、黒の網タイツで、何ともエロティズムに満ちている。

彼女はヒール十五センチのパンプスを履き、モデルのように紗枝の方へ歩いてきた。

かわって横美祢先生は、店長とはテイストの違った、クール＆キユートなファッションだった。

普段束ねている髪をおろし、カールさせて、大きなバタフライの髪留めをつけていた。

タイトなピーコックブルーのコートをまとい、前ボタンは止めていないので、サテンのミニワンピースがそこから覗いた。

ワンピースの模様が可愛い。

黄色のドットがつながら、波打つような縦ラインのプリントが、彼女の体をもっとスマートに見せた。

シックなコートとのアクセントが絶妙だ。

横美祢先生は、ヒール九センチのショートブーツを履いて、胸をはって、上品に歩いてくる。

繁華街のごった返す歩道で、道行く人々は、二人に道を譲っている。

やばい！ あたし、完全に場違いだ！

紗枝は踵を返して帰ろうと思ったが、しっかり二人に腕をつかまれた。

「紗枝さん。今、逃げようとしてませんでした？」
「ひっ」

意地悪な笑みで、横美祢先生が紗枝の耳もとをくすぐった。

紗枝は、彼女の口から、蛇の舌がちろちろと出ているように思えた。

ぎゃー、エステで見るより、小悪魔キャラだ！

紗枝は泣きそうになりながら、苦笑いをみせ、懇願した。

「えーん、お二人様。そんなによらないでくださいーい！」

あたし、みずばらしく見えちゃうよー」

「ふふふ、なんせ、『紗枝さん、スカートはかせよう！』計画のため、

横美祢先生と短いスカートを選んではいてきたんですから」

店長は微笑んで、腰をくねらせて見せた。

周りの男が、ざわつとした。店長に釘付けになった。

店長は媚態^{びたい}をおびて、彼らを一瞥^{いちべつ}した。

濃いリージュの塗られた唇の口角が、綺麗に持ち上がった。

「店長！」

紗枝はなぜだか恥ずかしくなつて、店長を守るように、男の目からガードした。

そしてそのまま二人を百貨店の中に押し込んだ。

「真面目にいきましょう。」

今日はあたしの買い物に付き合ってもらえるんですね？」

紗枝はぜーぜーと息を切らせて、店長にいった。

「もちろんですよ」

店長は可笑しそうに微笑んだ。

「ではでは、レッツ・ショッピング！」

横美祢先生が、ハイキングに出かける子供のように、百貨店の奥を指差した。

*

一階の奥はランジェリー売り場だった。

まずはそこで、紗枝の女度をアップさせようということになった。

「てか、彼氏もないのに、何でもまず下着からなんですか？」

紗枝は、呆れと照れを入り混じらせて、きいた。

「何いつてるんです紗枝さん。女は下着から綺麗でなくちゃ」

横美祢先生はびしりといった。

「そうよ、紗枝さん。いつ何時チャンスがあるのか分からないんだから」

コートを脱いだ店長は、上下黒の、カーディガンとミニスカートの姿だった。

店長は魅惑的に微笑み、パンティラックから、これまた黒のレースのパンティを広げた。

「もう店長。あんまり浮気していると、旦那様が怒っちゃいますよ」横美祢先生がしたためた。

「えっ！？ 店長結婚してるんですか！」

紗枝は思わず声を上げた。

ランジェリー売り場の店員が、こちらを振り向いた。

紗枝は口を紡いだ。

「そんなに驚き？」

店長はきいた。

「そりゃもう」

紗枝はうなづいた。

「所帯じみてませんか？」

「ええ！ そりゃ、もう！」

店長が渋い顔を見せた。

「ち、違います！ 大丈夫ってことですよ」

紗枝は大慌てで、補足した。

そして紗枝は腕を組んだ。

うつん。しかし、店長は結婚してもこんなに綺麗で……

それじゃあ世の妻は、「あれ」でいいのか？

紗枝は実家の母を思い出した。

テレビの前で寝転んで、煎餅をむさぼっている中年太りの母の姿

が目^めに浮^うかんだ。

「紗枝さん、結婚したからって、女やめちゃダメですよ」

店長が、紗枝の思惑をくみとるようにしていった。

「いつまでたつても綺麗でありたいですものでしょう」

「はい、その通り」

紗枝はますます店長を尊敬した。

「はい、紗枝さん。これなんかどうですか？」

横美祢先生が、紗枝に下着を一枚見せた。

淡いピンクの、紐パンティ。

「はきません！」

紗枝は真っ赤になって、それを捨てた。

三人は店員にしかられた。

第十五話 男にたいする審美眼

それから三人は、ヤングファッションの階にいった。

紗枝は、二人がオススメする服を、とりあえず何着か試着してみた。

二人は紗枝に、とにかく女の子らしい服を着せた。

試着室から出てきた紗枝をみて、横美祢先生が手をたたいた。

「ほら、紗枝さん。このプリーツスカート、とってもよく似合いますよ」

「ほんとう。紗枝さん、よく似合ってますよ」

店長はいった。

「ほんとですか」

脚の太さが気になって、紗枝は膝上のプリーツを、無用に引っぱった。

鏡に映る自分の脚は、やはり、太い大根にしか見えなかった。

「紗枝さんは自分で思っているより、ずっと脚も綺麗ですよ」

これくらいはかなくてどうするんです」

横美祢先生が真面目な顔でさとした。

「ほんとにですか？」

「ほんとです」

二人はこくこくとうなずいた。

二人の説得のおかげで、紗枝はプリーツスカートと、それに合うブーツ。そして首もとのあいたブルーのセーターを購入した。

試着室でそれらを一通り合わせてみたとき、紗枝は自分の変身ぶりに驚いた。

「すごい……あたしじゃないみたい」

「ねー、だからいったでしょ。紗枝さんは綺麗になれるって」

店長は、横美祢先生と目を合わせていった。

「本当、可愛いですよ、紗枝さん」

横美祢先生も大満足な顔をして紗枝を褒めた。

そして二人は「ダイエツト成功のお祝いだ」と、洋服と靴の代金を払ってくれた。

「ええ、悪いですよそんなの！」

紗枝はあわてて、断った。

「いいんですよ。」

これからも、このスカートのウエストがゆるくなるくらいまで、がんばりましょうね」

店長はウインクして、財布の中からお札を出した。

紗枝は顔を赤くして、二人への感謝で胸をいっぱいにした。

*

買い物を終えて、紗枝はお茶だけでもおごると、百貨店のカフェに二人を誘った。

三人がカフェに入ると、店員もお客も一瞬動きを止めて、二人の美女に釘付けになった。

紗枝は両脇にいる二人を見つめ、自分も早くこんな風に綺麗になりたいと思った。

ハーブティーを飲みながら、三人は美について、長くおしゃべりをした。

「それにしても、店長。今日のランジェリー売り場、やっぱりラインの型がしっかりしてないですねえ」

残念そうに横美祢先生がいった。

「本当ねえ」

頬に手をあてて、店長はいった。

「え、そうですか？」

紗枝が尋ねた。

「やっぱり、ラインを綺麗に作る、補正下着と比べるとね」

横美祢先生が溜息をついていった。

「補正下着って、あの、ガードルとか、鎧みたいなブラジャーとか？」

「鎧って、紗枝さん。コルセットといいましょうよ」

困った顔で横美祢先生は笑った。

「最近の補正下着は、冬場は暖かいし、夏場がむれなくて、快適なんですよ。」

全然苦しくないんですよ」

横美祢先生は澁刺としていった。

「本当ですか」

いぶかしげに紗枝は笑った。

彼女は実家でよく通った銭湯を思い出した。太ったおばちゃんが、肌色のダサい補正下着をつけている。

「でもいくら性能がよくなったって、服の下は見せられない姿でしょう？」

紗枝は皮肉めいていった。

「そんなこと無いですよ。だって私たちも今、着てますもん」

「え？」

「ほら」

ざわっ！

カフェで、彼女がいる男性までもが、そちらに釘付けになった。

横美祢先生は脚を組んだままスカートを持ち上げ、ちらりと、ブラの柄が入ったピンクのガードルが覗いた。

「私も、ほら」

店長がいった。

「おお！」

周りで嘆息の声があがった。

コートを脱いでいた店長は、カーディガンのボタンを外し、勝負下着でも通用しそうな、黒の補正ブラをチラ見せした！

紗枝は両手を上げて二人を止めた。

「わー、分かりました、納得しました。いいからそれを隠してください」

二人はスカートを下げ、ボタンを留めた。

周りから、「あゝ」という溜息がこぼれた。

紗枝はぐったりしてうなだれた。

「しかし……本当に綺麗ですね」

紗枝は落ち着きを取り戻し、確かに綺麗だったと、補正下着の美しさを認めた。

「でしょ。エステの世界は日進月歩です」

横美祢先生はいった。

「店長や先生って、そんなに綺麗なのに、常に努力を怠ってませんね」

紗枝は感心していった。

「それはもちろん」

店長はいった。

「自分磨きは一生ですもんね」

「そう、私も」

横美祢先生はいった。

「すごいですねえ。そりやもう昔から男性は引き手あまたですよ」

紗枝は感心していった。

「そんなこと無いですよ。」

それに、昔はもつと太かったし」

横美祢先生はぺろりと舌をだした。

「えー」

「大学生の時、手痛い失恋をして、それでエステに通うことにしたんです」

「そうなんですか？」

紗枝はびっくりしていった。

「そのままエステの世界に惹かれて、こうやって仕事にまでなっち

「やったんですけど」

横美祢先生は朗らかに笑った。

「私が新入りの時に、ミネちゃんを担当したのよね」

店長が懐かしそうにいった。

え。じゃあ店長って、今いくつなんだろう？

紗枝は気になってしょうがなかったが、そこはあえて流しておいた。

横美祢先生は続けた。

「エステに通って綺麗になって、初めて分かったんだけど、人って本当に外見で他人を判断するんだなあって思いました」

「それって……」

紗枝は言葉を詰ませた。

「振られた相手は、私が痩せて綺麗になると、急に手のひら返しちやつて。」

『やつぱりお前が忘れられない』って。あつく手を握られちゃいましたよ。

そしてそのまま、私たちは「

横美祢先生は両手の人差し指を、一方向に突き立てた。

「ああ」

紗枝は顔を赤くした。

ベッドインか、大人だあ。

「でも、私。それから彼の事が全然ときめかなくなって」

「ええ？」

「それで、三日もたたずに、お断りしました」

「そうなんですか」

三日。微妙な期間だな。

横美祢先生は続けた。

「だって、痩せたからって手のひら返す男なんて、ちっちゃいじゃないですか。」

それに気付けたのは、自分が綺麗になったからです。

綺麗になる努力をしなかったら、他人をひがんでばかりでした」

「つまり……そういった経験で、先生は人を見る目が変わったってことですね」

「そう」

横美祢先生は、にっこり微笑んだ。

「それにあたし、二十一歳まで付き合ったことなかったんですよ。初めての相手がその男だったんです。

そしてその後、最高の彼氏に出会って、今も、ラブラブです」

横美祢先生は子猫のように微笑んだ。

「えー、こんなに綺麗なのに、二十一まで彼氏がいなかったなんて」

「紗枝さん、人の出会ってのは、そういうものなのですよ」

店長は、しみじみと頷いていった。

「紗枝さんも、これから、もっといい人に出会えますからね」

横美祢先生は、微笑んでいった。

紗枝は、その言葉に、どきりとした。

第十六話 あなただけの beautiful（ビューティフル）

もつといい人……

「あたしは……あたしをフツた彼を、もう好きじゃないんでしょうか？」

紗枝はいった。

その質問に、二人は黙った。

横美祢先生は、ちよつと首を傾げて、困ったような顔で、ふつと微笑んだ。

紗枝は急に胸が、きゆうとなった。

店長の方を見ると、店長も微笑んでいた。少し、憂いに満ちた目だった。

紗枝は、そのとき、なぜだかとても、寂しくなった。

紗枝はどうして自分が今、こんなに寂しいのか分からなかった。

待つて。あたしは、大崎君を見返すために、エステを始めた……んだよね？

紗枝は瞬きをくりかえし、どこに目をやればいいのか分からず、じつと目の前の紅茶に視線を落とした。

ハーブティーに映った、自分の顔をじつと見つめた。

ねえ、あたしは一体周りからはどう見られてるの？

「自分を磨けば……周りを見る目も、養われていくのでしょうか？」
紗枝はぼつりと尋ねた。

そして顔を上げて、二人に問い詰めるような表情で尋ねた。

「その、つまり、今までの恋愛とは違った恋愛が、できるようになるのでしょうか？」

「それはその人の、これからの意識の問題ですよねえ」

横美祢先生はいった。「どれだけ綺麗な人でも、たまにすごく子供な人ついていますからね」

「外見を磨いているだけじゃ、ダメってことですね」

紗枝はいった。

「そうですね。」

やっぱり、人間として成長するのは、外も内も磨こうとする意識と努力にかかっていると思いますよ」

横美祢先生はうなずいた。

紗枝もなるほどと、うなずいた。

そうだよね。磨き方も大事なんだ。あたしも皆に「内面も外見も綺麗だね」って言われる人になろう。

そう、まさにアンジェリーナ・ジョリーのようなボディに、サンドラ・ブロックのような性格を！

いつもの癖がでて、紗枝は妄想を膨らませて、にやりと笑った。

それを見透かすように、店長が微笑んで、紗枝の右肩をたたいた。

「紗枝さん、この前、私は『見た目は大事だ』って言いましたよね」
店長が尋ねた。

「はい、覚えてます」

紗枝はいった。

「そこでね、ちょっと誤解して欲しくないことは、見た目も大事だけど、世にもてはやされる、いわゆる『美人』を目指すことが、大事というわけではないんですよ」

「どういうことですか？」

紗枝は戸惑いを隠せなかった。

「人それぞれ、味のある外見を持っていますよね。」

それを自分なりに磨いている人を見ると、『ああ、いい外見を保ってるなあ』と思うんですよ。

かっこいいなあと思います。本人の心構えが、外見ににじみ出てきているからですね。

だから私は外見にも気を使います。私なりに、ある程度潔く、着飾らない服を好んだり、私に似合うメイクがいいなあと思ったりしますもの。外見を整えると、精神も整ってくるんですよ」

そこまで言われて、紗枝は気付いた。

「つまり、自分なりの綺麗さを見つけてるって事ですか？」

「そう。見た目を大事に、個性を大事に」

店長はにっこり微笑んだ。

「そうしたら、自然に自分に合った人があらわれるんですよ」

横美祢先生は嬉しそうに微笑んだ。

「あらゆる面で、見た目って、人をあらわす鏡ですよ」

横美祢先生の言葉に、店長は納得するようにうなずいた。

そっか、そうなのか。

紗枝は自分の美意識の未熟さに反省しながら、感動していた。ときどきしながら、紅茶にうつる自分を見つめた。今までよりも、自分を大事にできそうな気がした。

すごい、「外見」のイメージが、どんどん変わっていく。

紗枝は胸をときめかせながら、そう思った。

店長はいった。

「だからね、私たちは、お店に来てくれるお客様全員、外見も内面も綺麗にしてあげたいなと思っていらっしゃるんですよ。」

紗枝さんご存知ですか？ ビューティフル beautifulって単語は、肉体にも、精神にも使われる形容詞なんですよ」

「へえ、ほんとですか」

ビューティフル

マインド

「beautiful mind”っていう映画もありましたし。体と心は切り離して考えるものじゃないですよ。両方高めていきましょう」

「そうですね!」

紗枝は握りこぶしを作って大きく返事した。

「コースはまだまだ始まったばかりですからね。このままもっと綺麗になっていこうね」

横美祢先生もガッツポーズをしていた。

「はいっ」

紗枝は満面の笑みを浮かべた。

ほんの少しだけ、大崎君への思いで、胸をちくちくさせながら……

第十七話 寂しさの理由

店長と横美祢先生と別れ、紗枝は一人マンションに帰った。

ベッドの上で、今日買った服と靴を眺めた。

それは、今まで紗枝が似合うとも思っていなかったものだった。でも、それが似合うと、彼女は知った。

自分が、少しずつでも、変わっている気がした。

「……………」

紗枝はベッドの上で考え込んだ後、思い切ったように、大きくうなずいた。

翌日、学校の講義がある二時間前に、紗枝はマンションを出た。いつものようにジーンズをはいて、パーカーを着る。ところを、その日の彼女はしなかった。

大学の最寄り駅まで、電車で三駅。

同じ車両に乗っていた、見知らぬ男の子数人が、紗枝をちらちらと見ていた。

紗枝はそれに気付いたけれど、自意識過剰になっているのだと自分に言い聞かせた。

大学の構内に入り、階段近くの掲示板の前に来たとき、紗枝はエミを見つけた。

エミは掲示板の前で試験内容のメモをとっていた。

「エミ」

紗枝は彼女を呼んだ。

呼ばれて、エミが紗枝に気付いて、後ろを振り向いた。そして、

びつくりして声をあげた。

「わあ！ 紗枝ちゃん可愛い！」

昨日買った、チェックのスカートとセーターを着た紗枝は、頬を少し赤らめて、微笑んだ。

「すごい似合ってるよ、ジーンズよりいいよ」

エミは、きやつきやつとはしゃぎ、紗枝の服を褒めた。

「ありがとう」

紗枝は顔を赤くして、お礼をいった。

「授業、エミも次？」

紗枝はきいた。

「ううん、あたしはこれで終わりなの。紗枝ちゃんは次？」

エミはいった。

「ううん。午後から。お昼食べてから行こうと思って」

「そっかー。残念。一緒にお昼食べれたらよかったね。」

私、もう帰らなきゃいけないんだ」

「そう」

「あ……ねえ紗枝ちゃん。何か痩せた？」

紗枝の耳元で、エミがささやいた。

「あー、うん。見える？」

「分かるわかる。すごいねー、冬場って、動かないしいっぱい食べちゃうし、太りがちになっちゃうのに」

エミはぴょんぴょんはねて、うらやましい、といった。

紗枝は黙って微笑んだ。ありがとう、とまたいった。

エミと別れて、紗枝は食堂にいった。彼女とすれ違う男子学生の何人かが、振り返って紗枝を目で追っていた。

紗枝はお茶を飲み、学食のおばさんに注文を告げた。定食が出来るまで、カウンターの前で立って待っていた。

ミニスカートとブーツの間に覗く、細い脚を、食堂の男子学生がそれを焦がすように見ていた。

紗枝はその視線に気付いていながら、無視した。

まだ、見られることの快感より、恥ずかしさが勝っていた。
そのとき紗枝は一生懸命、恥ずかしいのを抑えてスカートをはい
ていたのだ。

そして紗枝は食堂の隅のテーブルについた。
ようやく一息ついて、紗枝は自分の脚をテーブルクロスの下でな
でた。

とても不思議な感じが紗枝をつつんでいた。
ようやく紗枝は、自分が外見にコンプレックスを持たなくなっ
てきていることに気が付いた。

ゆっくりお昼をとり、食堂を出る頃には、紗枝は落ち着きを取り
戻していた。

教室に行くため、階段を上がった。
上がりきったとき、紗枝はどきりとした。

向こうの廊下を歩いている男子学生の団体の中に大崎君がいた。
大崎君が一人、階段を降りようと、こちらに向かってきていた！
紗枝は、階段の前で、立ち止まった。

横を向いていた大崎君が、こちらを向いた。
彼の表情がぴたりと止まった。

紗枝は、真つすぐに大崎君を見つめていた。
スカートと、セーターと、ブーツを履いた女の子が、彼女をフッ
た好青年を見つめていた。

大崎君も、目をそらさずにいた。無表情で紗枝を見つめた。
そして、大崎君は眉をひそめて、ほんの少し悲しそうに、微笑ん
だ。

紗枝は、大崎君のその笑みを見て、一気に肩の力が抜けた気がし
た。

ゆっくりと、紗枝は歩いていった。大崎君の方に向かって。
大崎君も、紗枝の方に向かって歩いてきた。
二人の距離が縮まった。

すれ違うとき、紗枝は何も言わなかった。顔をそらすことも無かった。

ただ、前を向いて、紗枝は歩みを止めなかった。

大崎君に声をかけることは、無かった。

紗枝が大崎君の横を通りすぎたとき、小さな声が、後ろで聞こえた。

「よ」と、大崎君のつぶやく声が。

紗枝は、一瞬歩みを止め、黙って微笑んだ後、「や」とだけ、返事をした。

後ろは振り向かなかった。背中で、大崎君の足音が階段を下りていくのが聞こえた。

教室に入って、紗枝は適当な席についた。授業開始五分前で、まだ教授は来ていなかった。

紗枝は息をはき、目を細めて教室を眺めた。

風が、全身を通り過ぎたような気がした。

寂しいかな、と紗枝は思った。

もう、失恋に引きずられることはないのだと分かった、それはそれで、彼女はちよっぴり寂しかった。

昨日、百貨店のカフェで、紗枝が感じた「寂しさ」とは、こういうことだったのだ。

まあ、まだ完全に失恋の痛手が消えたわけではないけどね。

紗枝は思った。今もやっぱり、失恋の辛い思い出が顔を出して、紗枝をちくちくと苦しめていた。

彼女は少し眉間にしわを寄せた。

でも、もう、夢には出ないかな。

紗枝は静かに目を閉じ、今の気持ちをゆっくりと味わった。

第十八話 恋は筋トレ

一月末。

テストもレポート提出も終わり、学生たちは大きく背伸びをして、二ヶ月間の暇をもてあそぶ春休みへと突入する。

「はい、確かにレポート受理しました」

事務の窓口で、職員が提出用紙に判子を押す。

「ありがとうございます」

栄次は嬉しそうに、いった。

締切日ぎりぎりのレポートを提出だった。

栄次はやっと、ほっと一息ついて携帯のメールをチェックした。

「あ」

紗枝から「今年度お疲れ」メールが入っていた。

《テストお疲れさん レポートちゃんと出したか》

ぷつと笑い、栄次は返信メールをうった。

《おおサンキュー、そっちもお疲れさん。てか、学校あんま来てなかっただろ》

《うん、テスト以外ほとんど行ってなかったな。栄次は今学校？》

《おう、今帰るところ。紗枝、学校いるの？》

《ううん、違うよ》

「……………」

聞かずにメールを切るのも一興かと思ったが、栄次は紗枝のうながしに応えてあげた。

ま、どうせエステだろ、また。
はまってますなあ。

栄次は微笑んでメールを打った。

《へー、てか、どこにいんの？》

《スポーツジム》

なんですと。

返信メールには書かなかったが、書きたかった。

*

「あ、えーいじ」

一日体験分の料金を払い、ジャージに着替えた栄次は、マシンジムに囲まれて汗を拭いている紗枝の姿に見つけ、眉を寄せた。

「えーと、君は一体、何になりたいのかな」

レッグプレスを押す紗枝の隣に立って、栄次は娘をさとするように、彼女に尋ねた。

「綺麗になりたいのよ」

紗枝はいった。

栄次は半分呆れて、呆れながらも紗枝に感心した。

「いつからジムに通い始めたの？」

「うーんと、十日前かな」

ぐぐつとマシーンを押しながら、紗枝は栄次を一瞥した。いちべつ

「店長にも聞いたからね、軽い負荷での筋トレとか有酸素運動なら、全然やっていいって。」

ただ、あんまり重い負荷で筋トレすると、また筋肉がこわばっちゃうかもしれないから、それは控えるってコトでね」

「すごいなあ、エステにスポーツジム。それって理想の痩せ方かもなあ」

「え、ほんと。いやん嬉しい」

おほほと紗枝は笑ってみせた。

紗枝のほころぶ顔を見て、栄次は微笑んだ。そして、もう一度紗枝にいった。

「そんなに、あいつが、好きなの？」

「それ、店長にも聞かれた」

唇をとがらして紗枝はいった。

「ぶっ、マジで。てか、そりゃ聞きたくなるよ」

「あたしがいつになくダイエツトに頑張るから？」

「ま、ね」

栄次は、胸の奥の複雑な心境は隠したまま、紗枝の言葉の続きを待った。

「人つてのは、ある日をきっかけに変わるもんなのよ。

あたしは大崎君がきっかけで変わろうと思えたの」

「ほう」

「それにねえ」

そこまで言つて、不意にマシーンを離して、紗枝は次のマシンに移動した。

「？ 何だよ？」

栄次も紗枝を追つて、隣のマシンに座った。素人並に、プルアップを扱ってみた。

「言われたのよ」

「？」

「告白したとき……つまり振られ文句よ」

「……何を言われたの？」

栄次は聞いた。

「『妥協はしないと決めてるから』って」
がっこん。

人の力が離れたことで、プルアップは大きく揺れて、フロア全体に金属音を響かせた。

それだけ言つて、紗枝はさっさと更衣室に入っていつてしまった。
栄次はそこに残り残された。

マシーンのサドルに座ったまま、つぶやいた。

「キッッ……」

慰めの言葉は思いつかなかった。

最終話 追加注文

ジムの近くの喫茶店で、紗枝と栄次は話しこんだ。
気温3度の外から暖かい室内に入ったからだろう、紗枝の頬はピンク色にそまっていた。

そんな紗枝を、栄次はただ見つめていた。

紗枝はハーブティー、栄次はココアを頼んだ。

ジャージや靴が入っている、大きなボストンバックを蹴りながら、紗枝はいった。

「あたしのコト、大崎君は好きじゃなかったのよ」

「あんま思い返すなよ」

痛々しくて、フオローに困る。

栄次は胸をキリキリさせた。

「だって、妥協はしないって」

栄次は、ううつと言葉つまされた。

「それは向こうに問題があるんだって」

「そんなことないよ。だって恋愛って相互関係でしょ？」

紗枝は、真顔になっていった。

「う、ま、そうだな」

栄次もそれには同意した。

「気が合わなかったのかなあ。けっこう話して、みんなで遊びにも行つてたけど……きつと何かが足らなかったんだなあ。」

人の価値って、外見だけじゃないって、エステで教えられた。

だから、なおさら次好きになる人には、外見も内面も、もっと綺麗になって出会いたいと思つたの」

「大崎にじゃないの？」

栄次がいった。

「え？」

きょんととして、紗枝は顔を上げて栄次を見た。

「大崎に会うために綺麗になるんじゃないかったのか？」

「大崎君にはもう会ったよ」

紗枝はいった。

栄次は、なぜか胸がざわついた。

「へえ、そう」

つとめてそっけなく栄次はかえした。

「うん」

目を細くして、紗枝は静かに微笑んだ。

「もう、いいのか？」

「……うん」

紗枝はいった。

「これからは、新しい自分のためにがんばるの。新しい自分と、新しい人のために」

「……前向きだなあ」

栄次が言葉をこぼした。

「そう？」

紗枝が笑った。

「失恋者のたわごとですよ」

「そんなことないよ」

栄次は真摯^{しんし}にいった。

「もちろん、誰かと付き合うことになっても、ずっと努力は怠らないよ。」

美に終わりは無いんだから」

紗枝は嬉しそうに、ふふっと笑った。

「ふむふむ」

栄次はこくりと一口ココアを飲み、唐突にいった。

「彼女と別れた」

それは紗枝を驚かせた。

「……として」

真顔で紗枝は聞いた。

「どしてって」

栄次は返事に困った表情を見せた。

「いや、ああ、そうよね、ごめん！」

慌てながら、紗枝は栄次に謝った。

「でも……何でよ、ほんとに」

紗枝は少し、寂しそうにいった。

「ほんとに何ででしょうねえ。最初、メールで《もう別れよ》とかいわれるし」

「はあ何それ、面と向かっていえっちゅうに」

啖呵をきつて、紗枝は、呆然とした栄次を見てはつとした。

なんにしても栄次に失礼な発言ではないか。紗枝はしゅうんと小さくなった。

そんな紗枝を見て、栄次は少し笑った。溜息をつき、テーブルに頬杖をついた。

栄次はいった。

「いや、ほんと、俺もそれは気分悪いからさあ。直接話して、ちゃんと別れたんだよ。」

何かなあ、どうも俺といると、つまんなかったらしくて」

「あたしはつまんなくないよ」

紗枝が勢いこんでいった。

栄次はきょとんとして、紗枝を見つめた。

は！ またやった。

慰めがまったく慰めになってない気がして、もう紗枝は、うつむいて黙ることにした。

ばか。じりじり、お口にチャック！

栄次はちよつと困ったようにして、笑ってみせた。

「まあねえ、俺も俺だよ。彼女が出来たからって、別段、オシャレする気も無かったし。」

なんとなく、いてくれていいいなあって、思ってたんだけどねえ……
こっこのも、相性の問題だったって言うのかなあ」

「……………」

「俺も、紗枝みたいに、外見をもっともつと磨こうとしてれば、続いたかねえ」

前置きなく、栄次は紗枝に、一人の男として尋ねた。

頬杖について、紗枝を覗き込むようにして見ながら、栄次はささやいた。

「女ってさ、隣においておく男が不細工だったら、耐えられないってホント？」

「どこからそんな情報入手したのよ」

苦い顔をして紗枝はいった。

「どうなの？」

「人それぞれなんじゃない。」

恋愛中は、言葉なんていらなくて、はつきり言う子もいるし。

でもあたしは、話せなきゃ嫌だし、別に外見はそれほど、だよなえ。

話して、すっごい楽しくて、それで好きになることの方が多いもん。

だから、人それぞれ」

「ふうん」

栄次はうなずいた。ココアをもう一口飲んだ。

「そのままでもいいのにねえ」

紗枝がつぶやいた。

彼に、そつとつぶやいた。

「……………」

栄次は、ココアをソーサーの上に戻して、じっと紗枝の顔を見た。

「本気で言ってる？」

「茶化す理由がどこにあんのよ」

紗枝が少し、むっとした表情で栄次をたしなめた。

栄次は笑った。

それは、はにかみ笑いとも、苦笑ともとれる笑みで、そして栄次

はウェイトレスに、コーヒーを追加注文した。
紗枝はそれを、頬を赤らめて見つめていた。
「もう少し話そうよ」

栄次はいった。優しく、まどろんだ笑顔だった。

窓の外は、かすかだけれど、粉雪が舞っていた。

外を歩く人から見れば、喫茶店のガラス張りの壁の向こうの楽し
そうな二人の姿は、どうしたって恋人同士にしか見えなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9092d/>

外見ファクター ～エステへGo!～

2010年10月8日12時40分発行